

縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現

—— 各時期における拠点集落形成を視点とした地域的分析 ——

石 坂 茂

1 はじめに	4 環状列石を伴う集落の機能・性格
2 中期後半の集落動向	5 後期の環状・弧状列石や配石墓との脈絡
3 中期末葉の環状列石の構造	6 結 語

—— 論文要旨 ——

縄文時代の中期末葉では、各領域内で集団統合の役割を担っていた拠点的な環状集落の斉一的崩壊現象が認められるが、それと軌を一にして環状列石を伴う集落が出現してくる。

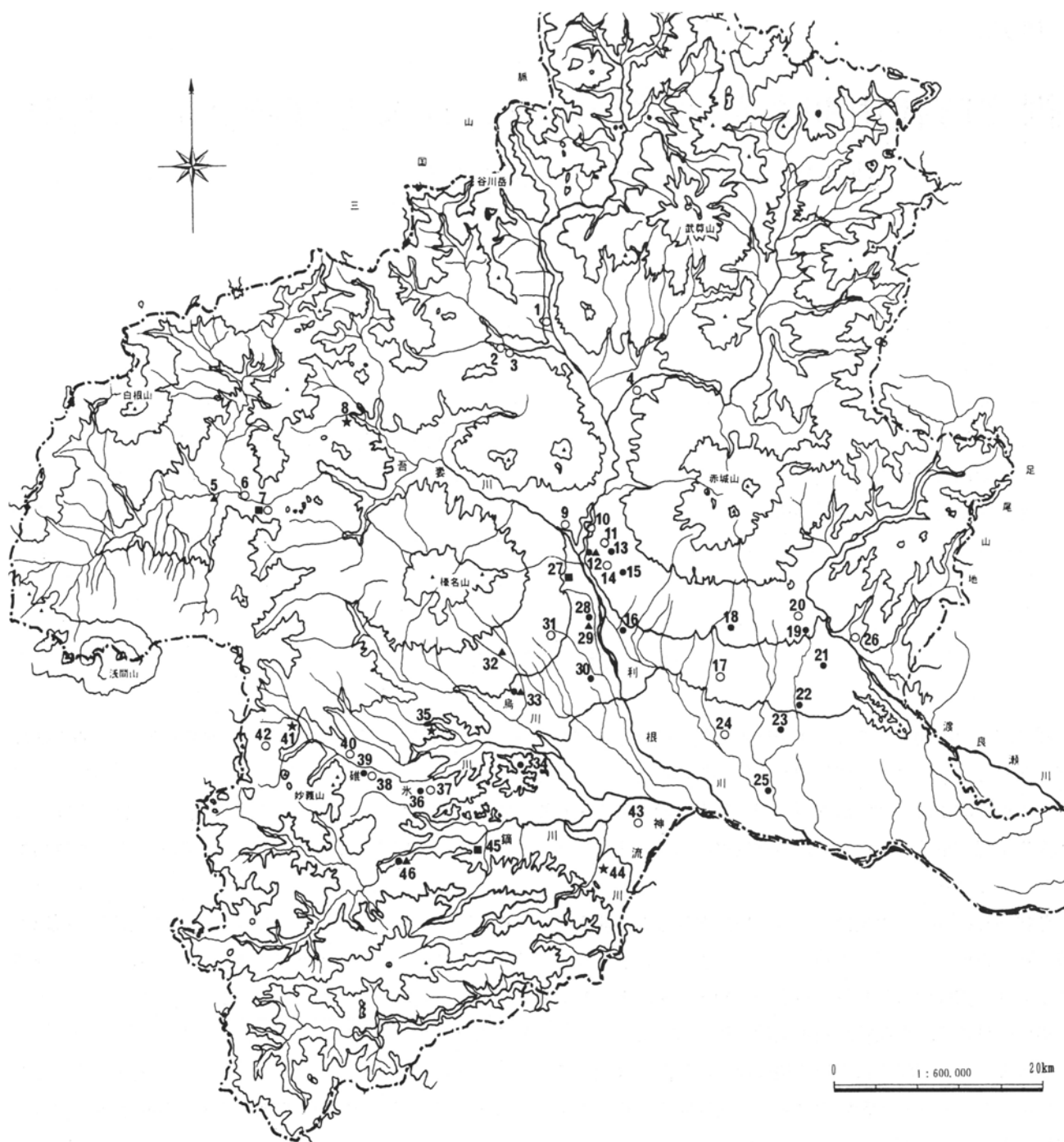
この転換期には、柄鏡形敷石住居の登場、屋外埋甕・石棒祭祀の活発化などの呪術的要素の高揚とともに、遺跡数の減少や小規模集落を単位とした散在的居住への変化も随伴し、祭祀構造や居住形態などの面で前段階とは大きな質的差異が生じている。

環状列石には、その規模・形態や構成要素などの側面で多様性が認められるが、基本的には直径が30m以上の規模を持つ隅丸方形的な大環状列石と、15mに満たないような小環状・弧状列石とに大きく2分することができる。また両者は、それを構成する石材量の多寡や移動・運搬に多人数を必要とする巨石の有無、それに構造的な精粗などの面で大きな違いが見られ、大環状列石を上位に位置づけるような祭祀形態の階層的構造が存在したと想定される。

このような大環状列石を伴う集落は、前段階の環状集落とは集団統合原理やセトルメントシステムを大きく違えるものであるが、やはり各領域内における集団統合の役割を担うものとして、新たな原理や価値観を基に形成された拠点集落と考えることができる。

この大環状列石集落は、列石下に集団墓的な墓坑群を随伴せず、その消長も短期間で終焉を迎えることから、後期の環状・弧状列石や配石墓には直接的な脈絡を持たない。しかし、当該集落内で顕在化する弧状列石と特定の柄鏡形敷石住居との融合・一体化傾向や祭祀構造から置換される小環状・弧状列石集落間との階層的関係などは、後期前半の「核家屋」を中心とした階層的な集落構造や集落間関係へと連繋する要素を胚胎したものであったと想定される。

キーワード
対象時代 縄文時代
対象地域 群馬県
研究対象 環状・弧状列石を伴う集落



1. 深沢(月夜野町) 2. 新治村役場(新治村) 3. 布施(新治村) 4. 糸井太夫(昭和村) 5. 坪井(長野原町) 6. 長野原一本松(長野原町)
 7. 横壁中村(長野原町) 8. 久森(中之条町) 9. 押出(子持村) 10. 浅田(子持村) 11. 滝澤(赤城村) 12. 三原田(赤城村) 13. 上三原田東峯(赤城村)
 14. 前中後(北橋村) 15. 道訓前(北橋村) 16. 旭久保C(富士見村) 17. 大道(前橋市) 18. 鼻毛石中山(宮城村) 19. 藤生沢(新里村)
 20. 上鶴ヶ谷(新里村) 21. 清泉寺裏(笠懸町) 22. 曲沢(赤堀町) 23. 三和・天ヶ堤(伊勢崎市) 24. 八坂(伊勢崎市) 25. 下海老(伊勢崎市)
 26. 千網谷戸(桐生市) 27. 空沢(渋川市) 28. 沼南(吉岡町) 29. 長久保大畑(吉岡町) 30. 国分寺中間(群馬町) 31. 下新井(榛東村)
 32. 中善地宮地(箕郷町) 33. 白川傘松(榛名町) 34. 大平台(高崎市) 35. 野村(安中市) 36. 砂押(安中市) 37. 天神原(安中市) 38. 行田梅木平(松井田町)
 39. 新堀東源ヶ原(下仁田町) 40. 五料ヶ久保(松井田町) 41. 坂本北裏(松井田町) 42. 暮井(松井田町) 43. 滝川II(藤岡市)
 44. 東平井寺西(藤岡市) 45. 田篠中原(富岡市) 46. 下鎌田(下仁田町)
- 大規模な中期環状集落 ★大環状列石を伴う中期集落 ■大弧状列石を伴う中期集落 ▲小環状・弧状列石を伴う中期集落
 ○環状・弧状列石や配石墓を伴う後期集落

図1 群馬県内における縄文時代中期末葉の環状集落と環状・弧状列石および後期前半の環状・弧状列石と配石墓の分布

1 はじめに

東日本の縄文時代において、中期末葉以降にその存在が顕著となる「環状列石」は、明治から大正における北海道忍路や音江の環状列石の報告を皮切りにして、大戦後の秋田県大湯環状列石の調査・研究を経る中で、その機能・性格をめぐる「墓地」あるいは「祭祀場」としての見解に二分されてきた。

こうした環状列石を巡る研究史については、山本輝久や秋元信夫により明らかにされており（山本1999、秋元1999）、その詳細についてはそちらに譲るが、近年青森県の小牧野遺跡や秋田県の伊勢堂岱遺跡などで新たに後期の環状列石が検出されたことにより、改めて議論が高まってきている。しかし、それは環状列石の機能・性格を巡っての議論が中心を占め、相変わらず「墓地説」と「祭祀場説」に二極分化したまま、集落を含めた構造的な分析にまでに至るような展開を見せていない。

このような状況の背景には、結論を導くのに性急なあまり、各地域における環状列石の属性や変遷過程、あるいはそれを随伴する集落との関係といった基本的な分析が欠落していることに起因する側面が、多分に介在しているように思われる。改めて言うまでもないことであるが、日本列島に展開した縄文文化は必ずしも斉一的なものではなく、少なからず時・空間的に異なった様相を有しており、各地域における文化的動向の把握は縄文文化研究の基本的課題と言える。

ところで、縄文時代の集落研究は、ここ数年来決して活発とは言えない状況であったが、昨年の12月に縄文時代文化研究会の主催によるシンポジウム「縄文時代集落研究の現段階」が開催され、現在における集落研究の到達点と問題点の確認がなされた。筆者は大工原豊とともに、その資料集の中で群馬県における縄文時代集落の様相について概説し、併せてその変遷の画期についても一定の解釈を試みた（石坂・大工原2001）。その中で筆者は、中期末葉の環状列石がその出現前段階に存在した拠点的な環状集落跡地には形成されないことの意味や、大規模な環状列石を伴う集落は新たな統合原理のもとに形成された拠点集落であること、多様な環状・弧状列石のあり方はそれを媒介とする祭祀に階層的構造が存在すること、さらに後期後半以降に展開する配石墓を伴う環状列石には直接的に連携せず相互間に画期とも言えるかなり大きな差異が存在すること、などをその変遷過程や立地論的分析を通じて論述した。しかし、頁数の制約から具体的な試料提示ができないまま論を展開したこともあり、内容的に不充分なものであったことは否めない。

本稿ではそうした点を踏まえ、新たな資料を追加・提示してその諸属性を分析し、中期末葉段階に出現する環状列石やそれを随伴する集落の機能・性格を環状集落の崩壊・消滅という文化動向の中で再認識するとともに、

併せて後期前半の環状列石・配石墓を伴う集落形成への脈絡を探りたい。

尚、分析の対象とする地域については、先述したように東日本というような広域を対象とする前に、地域的な様相を明確にする必要があるという観点から、群馬県域の資料を中心に扱うことにする。また、県内の環状列石については、既に菊池実や田村公夫の研究があるが（菊池1988a・b・1990、田村1998）、ここでは研究史的にその内容紹介はせずに本文中での個別検討を通じて、基本的な考え方や資料評価などの問題点について取り上げてゆくつもりである。

2 中期後半の集落動向

(1) 環状集落の形成と集中的居住形態

環状集落の立地 中期末葉段階に大規模な環状列石が出現する背景や、それを随伴する集落の機能・性格を理解するためには、その出現前夜の中期後半の集落や遺跡の動向を理解する必要がある。これに関しては、既にその一部を論述しているが（石坂・大工原2001）、論を展開する都合上再述しておきたい。

特筆するまでもなく、群馬県域においても中期後半の集落の特徴は、100棟以上の堅穴住居を有する大規模な環状集落の形成にある。こうした環状集落は、利根川中流域や東毛域では三原田遺跡（赤山他1980・1990・1992）を代表例として、道訓前（長谷川・他2001）、上三原田東峯（長谷川・他2001）、旭久保遺跡C、鼻毛石中山（細野・他1996）、藤生沢（藺田・他1977）、曲沢（松村1979）、下海老（松村・他1986）、清泉寺裏（若月1983）、天ヶ堤（金子2001）、沼南（松村・他1999）、国分僧寺・尼寺中間地域（桜岡・他1986）など、そして西毛域では白川傘松（関根・他1997）、大平台（下条・他1989）、砂押（井上・他1999）、下鎌田（大賀・他1997）、新堀東源ヶ原（千田・他1997）などの17遺跡で確認されている。

それらの分布状況を見ると、図1に示したように西毛の吾妻川上流域や北毛の利根川上流域には希薄で、利根川中流域とそれに隣接した西毛の碓氷川流域に比較的に集中している。こうした分布の濃淡については、現在までの開発頻度による遺跡発見の差異を多分に反映している可能性もあり、これのみで環状集落の立地動向を論ずることは難しい。しかし、それらの立地が、いずれも丘陵末端部や河岸段丘などの比較的広い平坦面の確保が可能な台地地形上に占地するという共通性を考慮すると、同様な地形に乏しい山地部の卓越する吾妻川上流域や利根川上流域などでの希薄性は、かなり当時の実体を反映している可能性が高いだろう。利根川中流域から東毛にかけての環状集落は、相互に5～7kmの間隔を置いて存在しており、各環状集落が各区域の中心的・拠点集落と仮定した場合には、その領域は半径5km前後のエリア

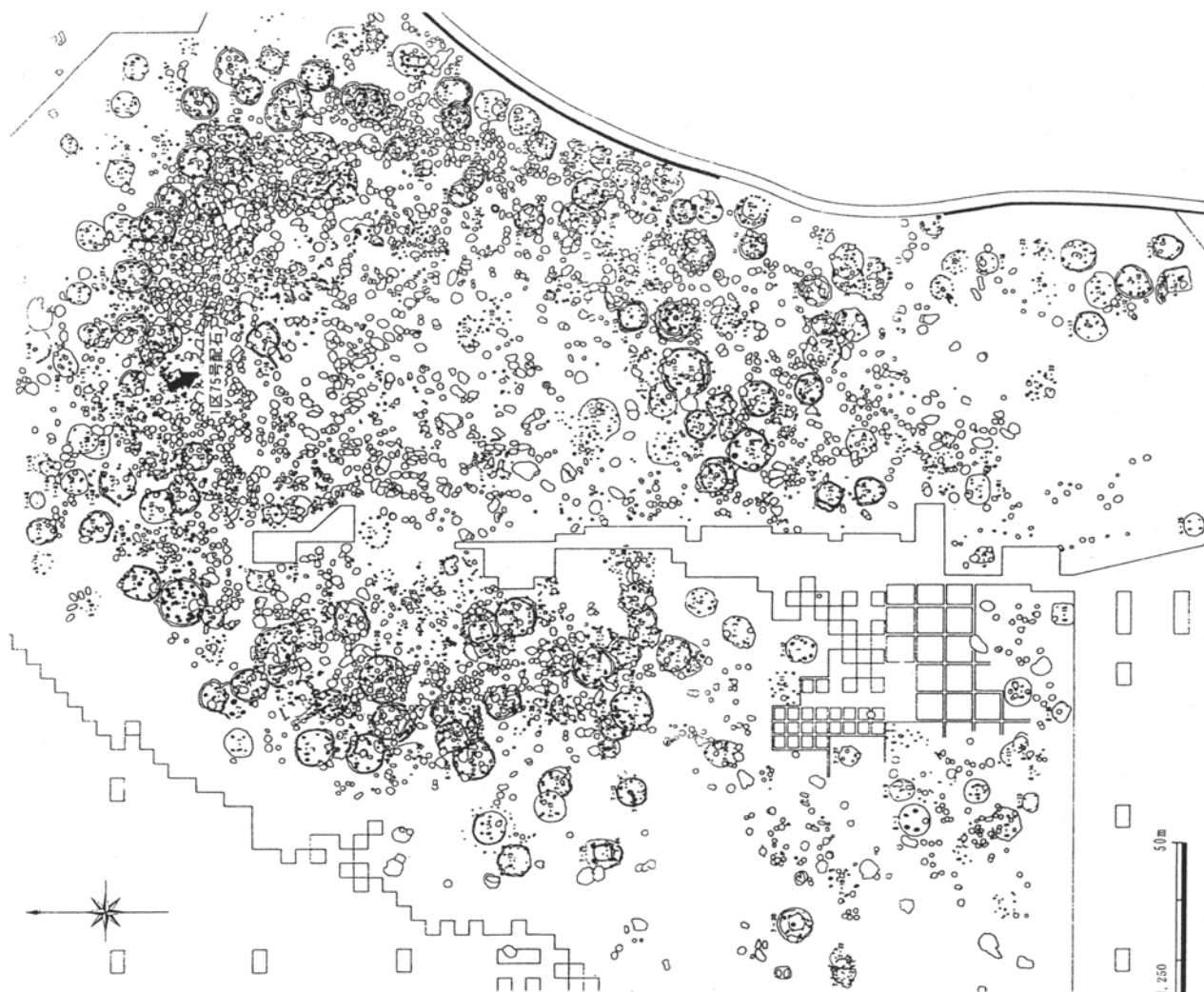


図2 三原田遺跡の環状集落 (赤山1990に加筆)

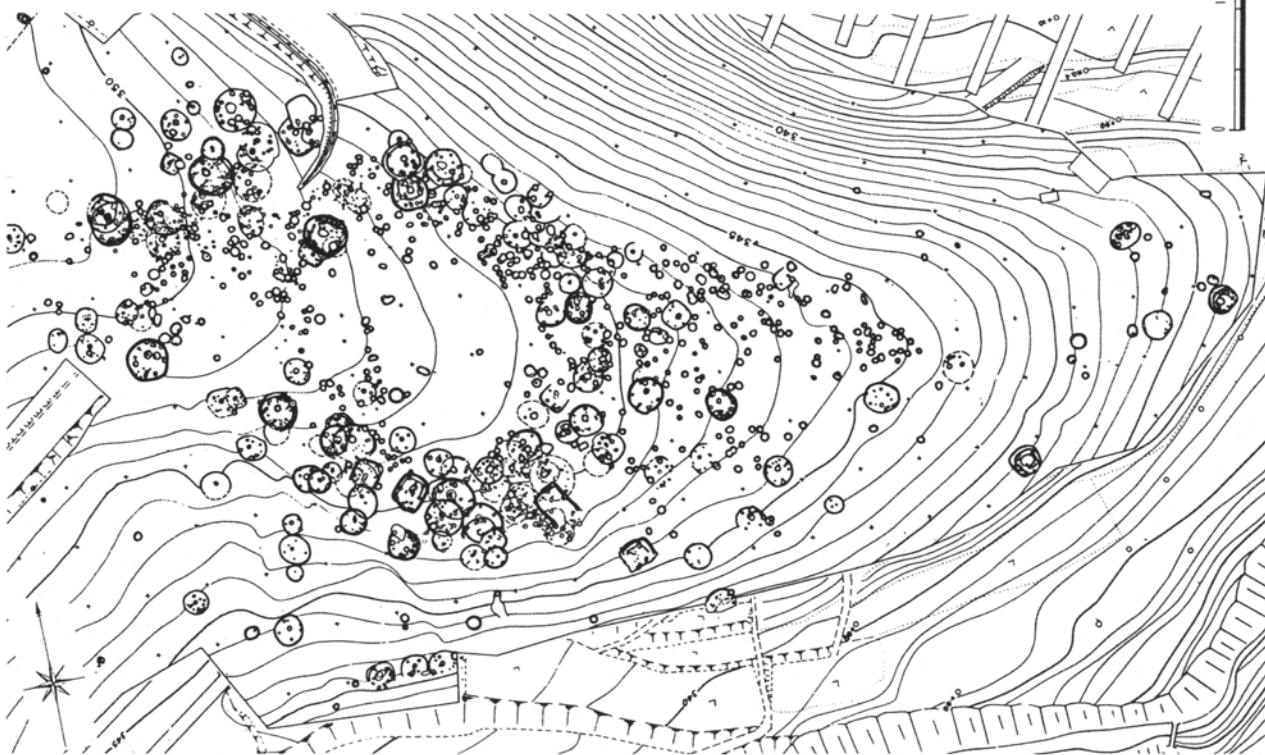


図3 新堀東原ヶ原遺跡の環状集落 (千田・他1997)

表1 各遺跡の集落規模と継続時期

(棟数)

遺跡名	五領台	阿I a	阿I b	勝坂2	勝坂3	加E 1	加E 2古	加E 2新	加E 3 I	加E 3 II	加E 3 III	加E 3 IV	加E 4	称I	称II	堀1	不明	合計
三原田				17	23	22	22	29	33	50	30	19	14	13	4	1	56	333
新堀東源ヶ原	3	1	1	25	17	8		23	34	18	21	8					16	175
白川傘松				2	3	1	8	9	8	12	8	7	7					65
下鎌田	4			6	10	4	4	7	6	30	28	17	15				56	187
暮井										1						1		2
荒砥二之堰										1	6	7	2	4	2	4	1	27
三ツ子沢中					1						1	1	3	2	1	1		10
沼南	1			6	12						2						17	38
野村												3	5				17	25
坂本北裏					1							1						2
久森										4		2	2					8
田篠中原											2	15	2					19
上原・三角												6	2					8

であったと想定される。

環状集落の形成と継続時期 17箇所の環状集落遺跡の中で、その全体を調査しているのは三原田遺跡を始め新堀東源ヶ原遺跡と下鎌田遺跡の3例に過ぎないために、環状集落の形成過程を始めとした詳細な内容の把握できないものが多い。この3遺跡を中心にして環状集落の形成や継続の時期をみると、表1のようになる。各遺跡相互で若干の違いはあるもののその形成期はおよそ勝坂3式期であり、その後も継続的な居住がかなり長期間にわたって展開する点で共通している。また、その多くが中期末葉の加曽利E 4式期で居住の終焉を迎え、三原田遺跡のように後期まで継続する場合でもその初頭段階の堀之内1式期で継続を断つという類似した特徴が認められる。これらの代表的な環状集落遺跡における時期別の住居数を見ると、各遺跡ともにその規模は加曽利E 3式I期～同II期をピークとして、それ以降は縮小する傾向を有していることが解る¹⁾。

下鎌田遺跡については調査精度が粗く、その報告内容にも不備が多いことから除外し、三原田遺跡と新堀東源ヶ原遺跡について、環状集落の構造やその変遷過程を図7に示した。両遺跡ともに、勝坂3式期に環状の集落形態が出現し、その形態が加曽利E 3式III期まで継続する状況を看取することができる。勝坂3式期段階での「居住帯」²⁾のサイズは、三原田遺跡が直径140m、新堀東源ヶ原遺跡が直径100mと他期に比べて最大となるが、これ以降でのサイズは同心円状に徐々に縮小し、環状形態が消失する直前の加曽利E 3式III期では、各々80mと60mに変化している。つまり、時間的経過に伴って居住域が外側から内側へと移行してゆく現象が、共通して認められるのである³⁾。

勝坂3式期～加曽利E 3式III段階にかけての墓と想定される遺構は、貯蔵穴と類似した径1～2mの円形土坑であり、葬法的には鉢・土器片被り葬が最も多く、他に墓標的に単体の大形礫や複数の小形礫を配するものや、鉢被り葬に抱石葬を付加したもの、抱石葬だけのもの、

底部の一部や胴部下位を打ち欠いた深鉢土器を土坑の上位に供前するもの、などの幾つかのタイプが認められる。しかし、これらの墓坑が特定の区域に集中するようなあり方は認められず、基本的には「居住帯」を構成する各住居に付随するように、その周辺に散在している。少数ながら存在する屋外埋設土器なども、墓坑などと近接して存在し、そのみが集中するような状況は見られない。また、「居住帯」内側の中心部には、勝坂3式期～加曽利E 3式III段階までの各時期を通じて堅穴住居を始め貯蔵穴・墓坑などの遺構は配置されず、広場状の空閑部が保持されて続けている点は、当該域における集落構成の基本的原理として認識することができる。これら以外の遺構の存在は顕著ではなく、特に関東南西部で多見される掘立柱建物が環状集落内で確認された例は皆無であり、当該期の群馬県域では採用されなかった可能性が高い。

こうした環状集落の一時期の規模については、住居型式やそこから出土する土器型式および重複関係などを考慮すると、その半数以下の10棟前後～10数棟に縮小すると考えられる。しかし、そうした場合でも、各環状集落の同一領域内に散在する一時期2棟前後で構成される小規模集落とは、対照的な集落の規模と言える。

前述したように、各環状集落は5km～7kmの間隔を置いて台地部に散在すると考えられるが、これら集落を中心とした領域分割と集中的な居住形態の存在を窺うことができる。このような環状集落と小規模集落との併存関係については、民族誌のモデル（羽生1990・1994・2000）に従えばレジデンシャルベースとフィールドキャンプ、あるいはそれに季節的な居住地移動などを加味した関係が想定されよう。いずれにしても、相互に機能を異にする集落が一領域内で社会的結合関係を持って配置されていると見て良く、いわば機能・性格を分有した各遺跡の複合体が各領域を構成する遺跡群の構造であろう。

環状集落は、第一義的に多人数による集中的居住の場としての性格を付与できるが、同時に黒曜石や硬玉製大珠などの稀少交易品をも集約する各領域の拠点的な性格

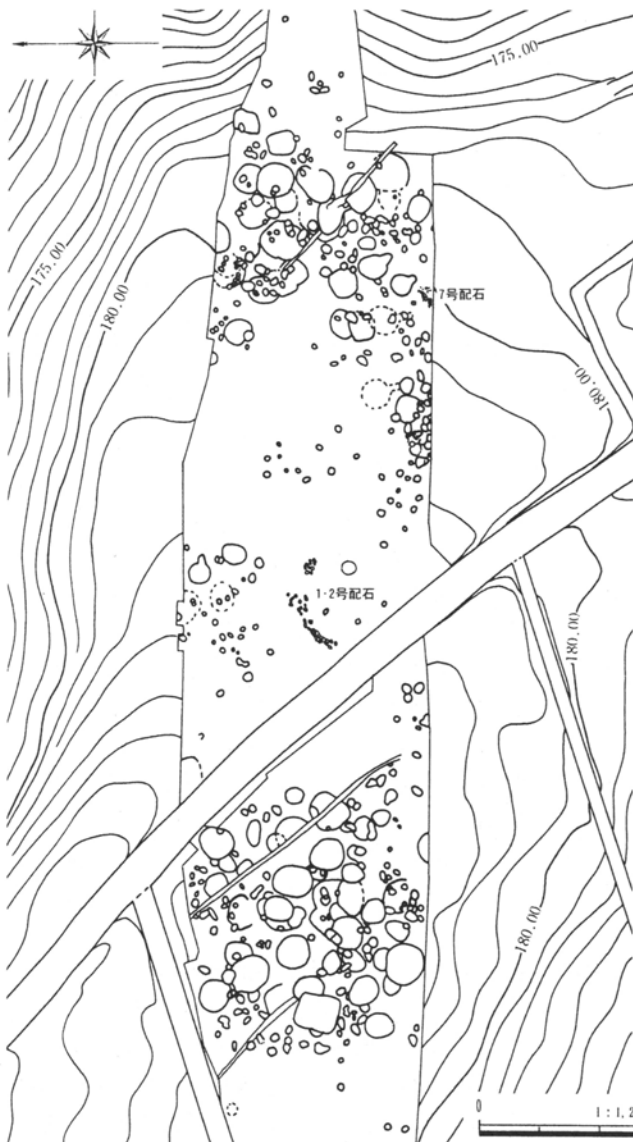


図4 白川傘松遺跡の環状集落 (関根・他1997に加筆)



図5 下鎌田遺跡の環状集落 (大賀・他1997)

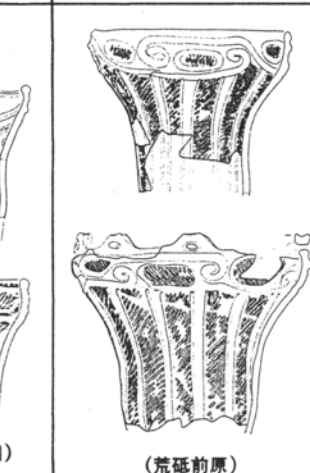
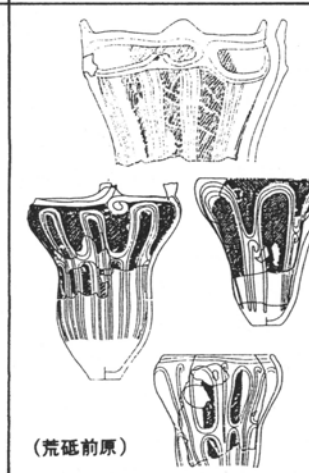
加曾利E3式Ⅰ期	加曾利E3式Ⅱ期	加曾利E3式Ⅲ期	加曾利E3式Ⅳ期
 (三原田)	 (三原田)	 (荒砥前原)	 (荒砥前原)

図6 加曾利E3式土器の段階区分

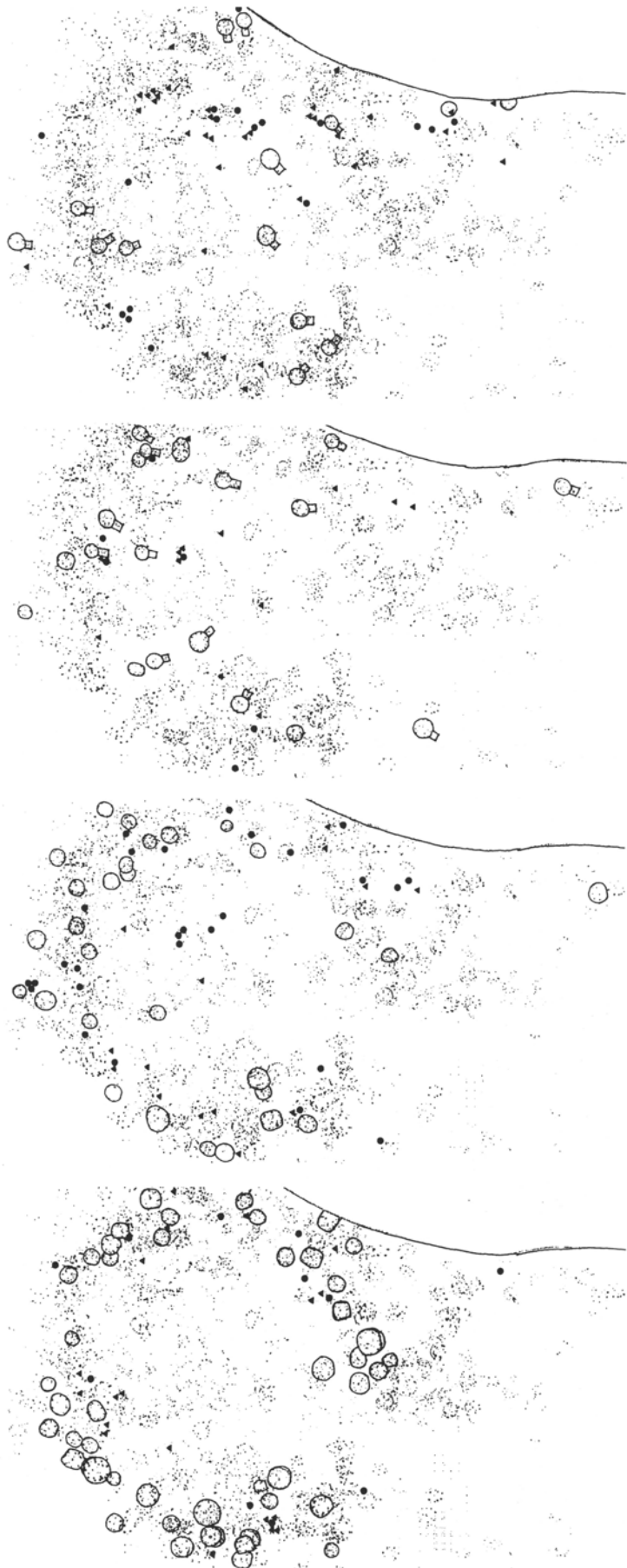
三原田遺跡

【加曾利E3式Ⅱ期】

【加曾利E3式Ⅲ期】

【加曾利E3式Ⅳ期】

【加曾利E4式期】



新堀東源ヶ原遺跡

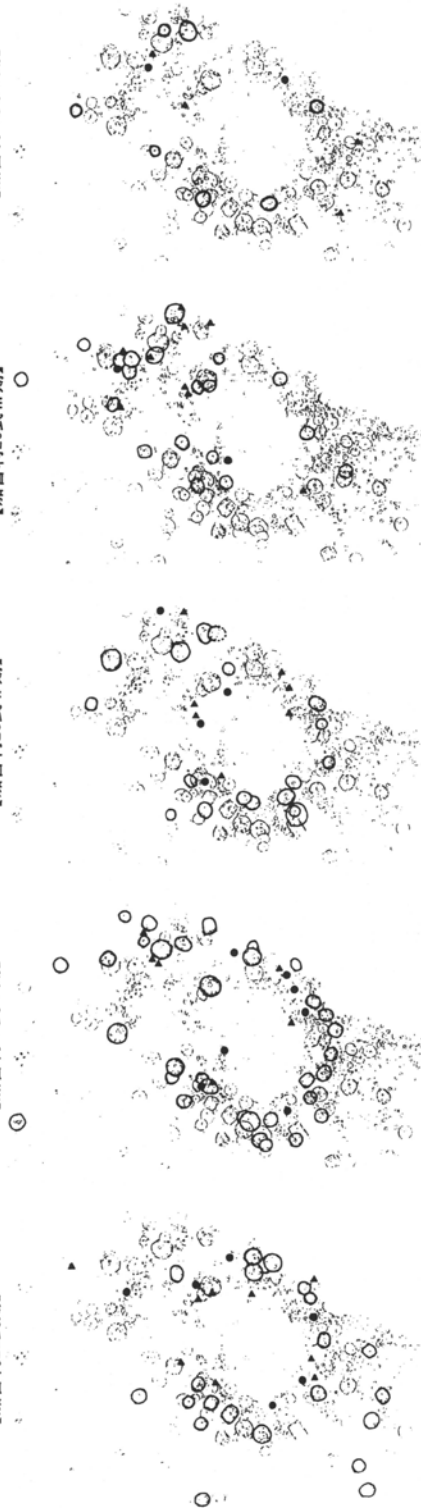
【加曾利E2式期】

【加曾利E3式Ⅰ期】

【加曾利E3式Ⅱ期】

【加曾利E3式Ⅲ期】

【加曾利E3式Ⅳ期】



● 坑
▲ 貯蔵穴
○ 環状列石

図 7 三原田遺跡と新堀東源ヶ原遺跡の集落変遷

表2 中期末葉～後期初頭の環状・弧状列石の規模と内容

番号	遺跡名	遺構名	構築時期	規模(m)と類別		列石の形態と類別				重層構造				列石の構築方法				列石に関する遺構や要素											
				分 類	線 状	円 形	弧 状	隅丸 方形	分 類	一重	二重	三重	乱積 配列	平積	小牧 野式	単位 配列	方形 組石	方形 配石	立石	焼土	集土 土坑	埋設 土器	墓 坑	配石 墓	敷石 住居	整地 作業			
5	坪井	弧状列石	加E 3 IV～加E 4	(長9.5)	II				○		C	○			○			▲				▲							
7	横壁中村	列石	加E 3～加E 4 ?	(長10～30)	I			○?			C?			○			○				?			▲					
8	久森	内縁環状列石 外縁環状列石	加E 3 IV 加E 3 IV～加E 4	30×27 (長60)	I I	○			○		A C		○? ○		○ ○		○ ○	○ ○	▲		○	?	▲	○	?				
12	三原田	1区75号配石遺構	加E 3新以降	5.0×4.4	II			○			B	○			○						▲		▲						
27	空沢	弧状列石	加E 3～加E 4 ?	(長10～50)	I			○			C		○		○						?		▲						
29	長久保大畑	1号・2号列石	加E 3 IV～加E 4	長(5.5)+1.9	II			○			C	○			○			▲		▲	▲?		○?						
33	白川傘松	2号石組列・1号配石 7号配石	加E 4 ? 加E 4 ?	(長20) (長4)	II II			○? ○			C C?	○ ○		○ ○				▲ ▲		▲ ▲		▲	▲	▲					
35	野村	環状列石 列石1 列石2 列石3	加E 3 IV 加E 4 加E 3 IV～加E 4 加E 3 IV～加E 4	36×30 (長41) (長62) 長22	I I I II	○ ○ ○ ○					A C C C		○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○			○	?		▲	○					
41	坂本北裏	環状配石遺構1 環状配石遺構2 環状配石遺構3 環状配石遺構4 1号集石	加E 3 IV～堀1 加E 3 IV～堀1 加E 3 IV～堀1 加E 3 IV～堀1 加E 3 IV～堀1	径10 (長11) (径6) 32×(22) 長7	II II II I II	○ ○ ○? ○?					B C B? A? C		○? ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	○ ▲	▲		▲			?					
44	東平井寺西	環状列石	加E 3 IV～加E 4	(径45)	I	○?					A?	○			○				▲		▲		▲						
45	田篠中原	環状列石	加E 3 IV～加E 4	(35×30)	I		○	○			C	○			○	▲		▲		▲	○	▲	○?						
46	下鎌田	1号配石	中期末葉?	長6.5	II		○	○			C	○			○						▲		▲						
6	長野原一本松	5-1号列石 5-2号列石 5-3号列石 5-4号列石	堀2～加B 1 堀2～加B 1 堀2～加B 1 堀2～加B 1	(長14) 長12.2 長6.5 長7.9	II II II II		○ ○? ○? ○				C C? C? C		○ ○ ○ ○				○				○ ○ ○ ○								
10	浅田	列石	堀2～加B 1 ?	(長40)	I		○?				C?		○		○	▲	○						○						
14	前中後	弧状配石遺構	堀2	(長13)	II		○	○			C	○			○		○				○	○	○?						
38	行田梅木平	2号配石墓群	堀2	長35	I		○	○			C	○				○						○	○						
42	暮井	環状列石01号	堀1	長6.2	II		○	○			C	○						○					○						

※▲は環状・弧状列石内からではなく、その周辺部より検出されている遺構。
※() 付の数値は部分的な検出規模で、未調査部分を残していることを示す。

を有している点にも留意する必要がある。

(2) 環状集落の崩壊・消滅期の様相

集中的居住形態の消滅 三原田遺跡に代表される環状集落は、加曽利E3式I期～同式II期でピークを迎え、その後徐々に集落規模を縮小しながら同式IV期には、集落構成の基本的原理であった中央空閑部を中心とする「居住帯」の環状配置構造が崩壊する。具体的には図7の三原田遺跡例に見るように、加曽利E3式III期の環状「居住帯」配置が散在的に変化して、前段階までの「居住帯」外側や中央の空閑部にも侵出する現象が認められ、それまで強固に維持されてきた基本的原理が崩壊しているのである。また同時に、竪穴住居の構造にも変化が生じ、床面に石を敷き詰めた柄鏡形敷石住居が出現してくる。同遺跡では、他時期住居との重複による攪乱で不明瞭なものを除けば、当該期の住居は全て柄鏡形敷石住居という斉一的様相を見せている。新堀東源ヶ原遺跡の場合でも、同段階の住居群が拡散的配置となって環状原理が崩壊しており、三原田遺跡ほどの斉一性はないもののやはり柄鏡形敷石住居の出現が認められる。

このように、環状集落遺跡においては、加曽利E3式IV段階に環状原理の崩壊現象と柄鏡形敷石住居の出現が軌を一にしていることに注目する必要がある。ただし、柄鏡形敷石住居それ自体はこうした環状集落跡地のみに構築されるものではなく、下記のような同時期の小規模集落にも通有なものであり、いわば当該期における斉一の現象と言える。

小規模集落を単位とした散在的居住形態の出現 中期末葉以降にも集落立地が後期初頭へと継続するのは、三原田遺跡や曲沢遺跡、天ヶ堤遺跡など少数存在するが、いずれもその集落形態は非環状であり、かつ一時期5棟前後の小規模な集落内容に変化している。こうした動向とほぼ時を同じくして、新たに加曽利E3式III・IV期に出現して加曽利E4式期までの短期間で継続を断つような上原・三角（長谷川1999）、荒砥北原（石坂1986）、市之関前田（細野1992）等の遺跡や、同期に出現して堀之内1式期まで継続するような荒砥二之堰（石坂・他1985）、熊野谷（前原・他1989）、芳賀北曲輪（金子1990）、三ツ子沢中（池田・他2000）などに代表される遺跡が存在する。総体的には、前者のような短期間で終焉する遺跡が目立つが、各遺跡ともにやはり柄鏡形敷石住居を主体とした一時期2～3棟前後の小規模なものである。

つまり、一時期10～20棟の規模を有した環状集落も、加曽利E3式IV期以降はこのような小規模集落と同質なものに変移していったと考えられ、それまでの集中的な居住形態から小規模集落による散在的な居住形態への転換期となっている。

ただし、三原田遺跡・白川傘松遺跡・下鎌田遺跡などは、当該期において後述するような小規模な環状・弧状

列石を伴っており、やや異質な側面を保持している。

(3) 環状列石を伴う集落の出現

遺跡の立地 環状集落の崩壊と柄鏡形敷石住居の出現が相関関係にあることは先に見てきたとおりであるが、これらと時期を同じくすると想定されるものに環状列石や弧状列石の出現がある。現在のところ、中期に比定されると思われる環状・弧状列石は、坪井（富田2000）、横壁中村（綿貫・他1997、群埋文1996）、久森（丸山・他1985）、三原田（前掲）、空沢（大塚1980・1985・1993、小林1991）、長久保大畑（田村・他2000）、中善地・宮地（田口・鳥羽1988）、白川傘松（前掲）、東平井寺西（古郡・他2000）、野村（千田・他2001）、田篠中原（菊池・他1990）、坂本北裏（金子・他1999）、下鎌田（前掲）などの13遺跡で確認されている⁴⁾。

それらの立地は、図1のように西毛の吾妻川・碓氷川・箱川などの各上流域の丘陵・山地部を中心に9遺跡が存在し、かなりまとまった分布が認められるが、利根川上流域の北毛や同下流域の東毛では、極めて希薄な状況を呈している。こうした分布の偏差については、前述の環状集落遺跡の分布動向と同様に、発見の契機となる開発頻度の差異を反映している可能性を考慮する必要があることは、言うまでもないことである。しかし、それまで多くの環状集落が立地した比較的开发の進んでいる利根川中流域では、三原田・空沢・長久保大畑の3遺跡を確認するに止まることから、環状・弧状列石の分布が山地部を中心に偏在する傾向を看取することができよう。北毛域については、今後での検出が予見される。

また、これらの遺跡では環状・弧状列石と同時期の集落が併存しており、基本的に環状・弧状列石そのみで単独立地することがない点は、それが集落内で執行された祭祀・儀礼と関係する遺構であることを示している。

出現の時期 これらの環状・弧状列石の帰属時期については、列石内の出土土器やその構築面直下の埋設土器、あるいは周辺に存在する敷石住居の構築時期や集落の存続時期等から判断し得る。久森・長久保大畑・野村・東平井寺西⁵⁾・田篠中原などはそうした例であり、加曽利E3式IV期～加曽利E4式期に比定できる。

伴出土器や住居等の遺構との関係が不明瞭な白川傘松・下鎌田などは、時期の確定が難しいが、集落自体の存続が加曽利E4式期で終焉することから、当該期を下ることはないと考えられる。また、坪井遺跡例は加曽利E3式IV期のSI09住居の、三原田例は加曽利E3式III期の1区75号住居のそれぞれ上部に構築されており、同様に各当該期を遡ることはない。ただし、坪井遺跡例については周辺区域の遺構の時期から見て、加曽利E4式期を下ることはなく、従って加曽利E3式III期～同4式期の間に収まると考えられる。

これらの事例を表2に一括したが、時期の確定しない

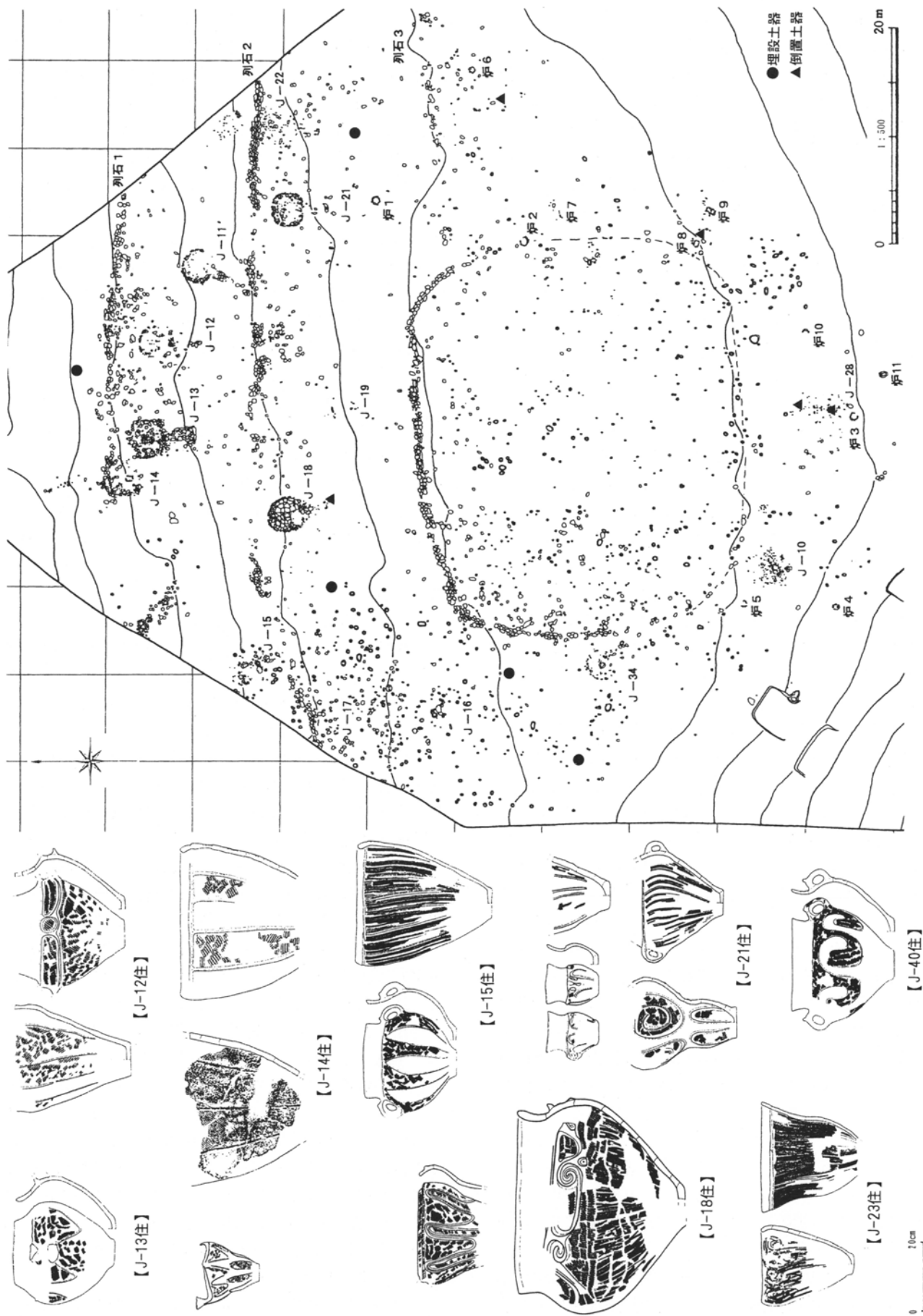


図8 野村遺跡の大環状列石を伴う集落と出土土器 (千田・小野2001に加筆)

白川傘松遺跡、下鎌田遺跡や坂本北裏遺跡の例を除けば、中期における環状列石の出現は加曽利E 3 式IV期にあることがほぼ確実であろう。また、その継続期間については、加曽利E 4 式期を下らないという状況が看取でき、その消長は比較的短い期間にて終焉するものと理解して問題ないだろう。つまり、加曽利E 3 式IV期に出現する環状・弧状列石は、基本的に後期初頭まで継続的に造営されることなく、中期という枠組みの中で一旦終焉すると見なすことができる⁶⁾。

3 中期末葉の環状列石の構造

(1) 環状列石の本体構造

規模・形態等の諸属性 前述したように、中期の環状・弧状列石は加曽利E 3 式IV期に出現して加曽利E 4 式期に終焉すると考えられるが、それがどのような構造を有しているのかを個々に分析する必要がある。先の13遺跡の環状・弧状列石は、調査範囲が狭小なことや後世の攪乱等を受けているケースが多いために、その全貌が明らかになっているものは極めて少ない。従って、その内容把握もかなり制約を余儀なくされるとともに限定的なものにならざるを得ないが、構造を分析するに当たって以下のような項目立てをして、各遺跡における環状・弧状列石の諸属性のあり方を見てみよう。

a. 列石帯の規模による分類。

- ・I 類：長軸長ないし直径が30m以上のもの。
- ・II 類：長軸長ないし直径が30m未満のもの。

b. 列石帯の平面形態による分類。従来、環状列石として一括されてきたが、列石帯の走行・区画方向や断続状態により明確な細分が可能である。

- ・A 類：隅丸形状
- ・B 類：円形状
- ・C 類：弧状

c. 列石帯の重層性による分類

- ・1 類：一重（単列）
- ・2 類：二重（2列）
- ・3 類：三重（3列）

d. 列石帯の構築方法による分類

- ・a 類：乱石配列
- ・b 類：平積み
- ・c 類：小牧野式

規模による分類は、換言すれば大規模なI 類と小規模なII 類とすることができるが、II 類の中でその長さや直径が20mを超えるものはない。また、I 類には直径が1mを超えるような巨石を始め多量の石材が用いられており、そこに投下された労働力の大きさなどの点でも両者の差異は際だっている。I 類には横壁中村・久森・空沢・野村・東平井寺西・田篠中原などの6遺跡が、またII 類には坪井・三原田・長久保大畑・白川傘松・下鎌田など

の5遺跡が存在する。

平面形態の分類では、隅丸方形のA 類に野村遺跡の「環状列石」（図8）と久森遺跡の「内縁環状列石」（図9）とを上げることができるが、部分的調査ながら東平井寺西遺跡の「環状列石」も、その主体となる大形礫の配列状況から見て同類に比定される可能性が高い⁷⁾。円形のB 類として確実なのは、三原田遺跡の「1区75号配石遺構」（図16-b）と坂本北裏遺跡の「環状配石遺構1」（図16-c）の2例である。このA・B 類は、環状列石の名称に相応する内容を有しており、その呼称については両類にのみ限定して用いることにする。また、弧状のC 類は、坪井遺跡の「弧状列石」（図16-d）、白川傘松遺跡の「2号石組列・1号配石」（図16-e）⁸⁾、田篠中原遺跡の「環状列石」（図10）、それに下鎌田遺跡の「1号配石」に確実な例が認められる。この弧状形態については、A 類やB 類が後世の攪乱を受けて弧状に残存したという可能性も皆無ではないが、野村遺跡の環状列石外縁部の「列石1～3」はその最終形態が弧状であることから見て、一つの完成形態として存在したものと理解される。横壁中村遺跡（図11）や空沢遺跡（図12）の例も、部分的調査ながら弧状形態を持つと想定して良いだろう⁹⁾。これら以外の形態として、直線状の列石も想定されるが、小規模な場合にはC 類の弧状との区別が難しく、存在自体が不明瞭である。ただし、後述するように列石内の各単位配石を連結する場合には、直線状となる箇所も認められることから、単独の完成形態としてではなく、環状列石や弧状列石に付帯する部分的なものとしてならば、存在し得るであろう。

列石帯の重層性の分類では、二重あるいは三重の配列を有するものに横壁中村・久森・空沢・野村などの4遺跡がある。先の分類では、ともに大規模なI 類に帰属するもので占められていることや、II 類にはそうした重層性が認められない点は注目する必要がある。

この3項目の分類結果を総合的に見るならば、先ず大規模なI 類にはA 類の隅丸形状とC 類の弧状の2形態だけが存在し、また二・三重に列石を配置する重層構造をもつものはこのI A 類とI C 類の両者にのみ認められることから、I A・C 類と2・3 類とが相互に密接な関係を有することが理解される。換言するならば、こうした重層的配列は、I A・C 類の大規模環状・弧状列石の特徴の一つとして認識されるものであり、II 類B・C 類の小規模な円形状・弧状列石には基本的に随伴しない要素であると考えられる。

構築方法については、前述のようなa～cの3項目との明瞭な関係性は認められず、大半の環状・弧状列石が大小の礫を混在させる不整然とした配列や石積み（とりあえずこれを「乱石配列」と呼称しておく）をしている。一方、野村遺跡例は人頭大の扁平な河床礫を用いて、そ

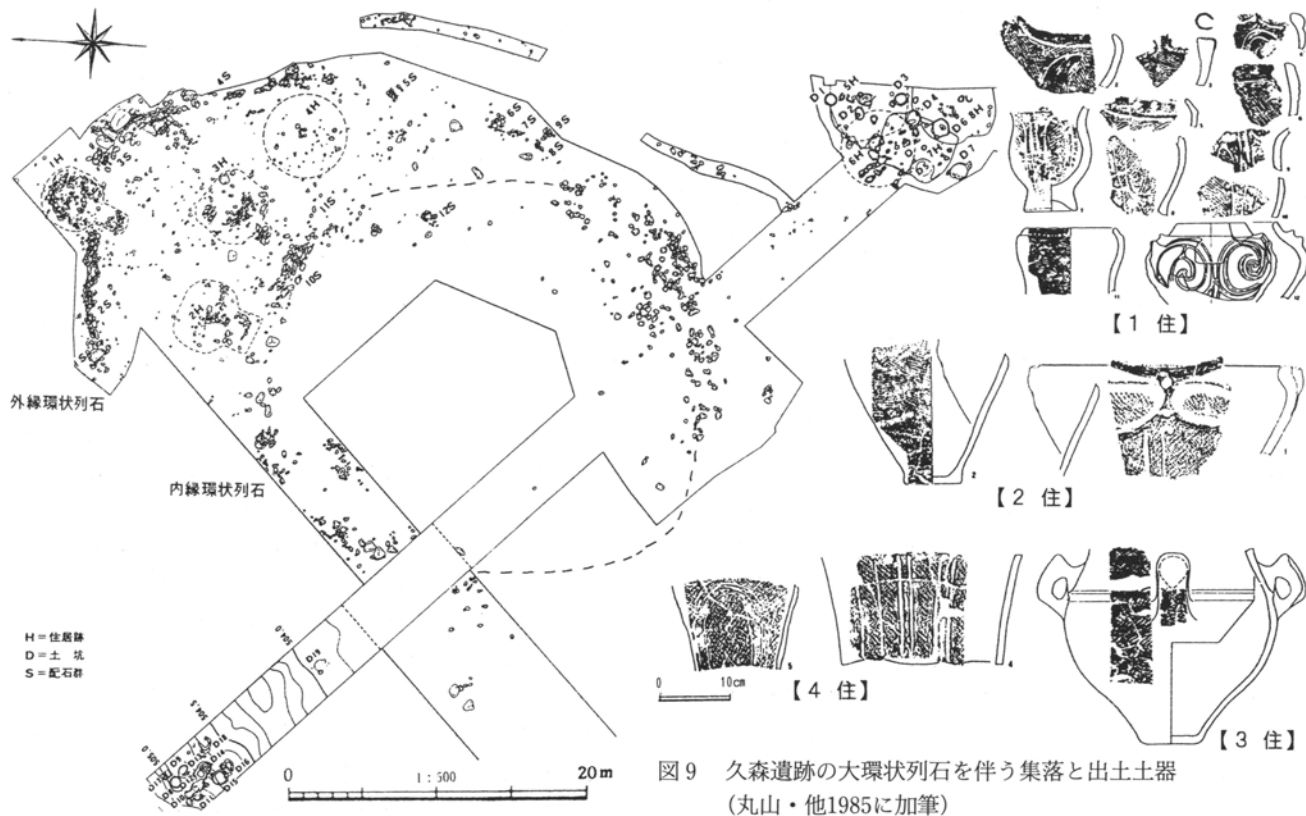


図9 久森遺跡の大環状列石を伴う集落と出土土器 (丸山・他1985に加筆)

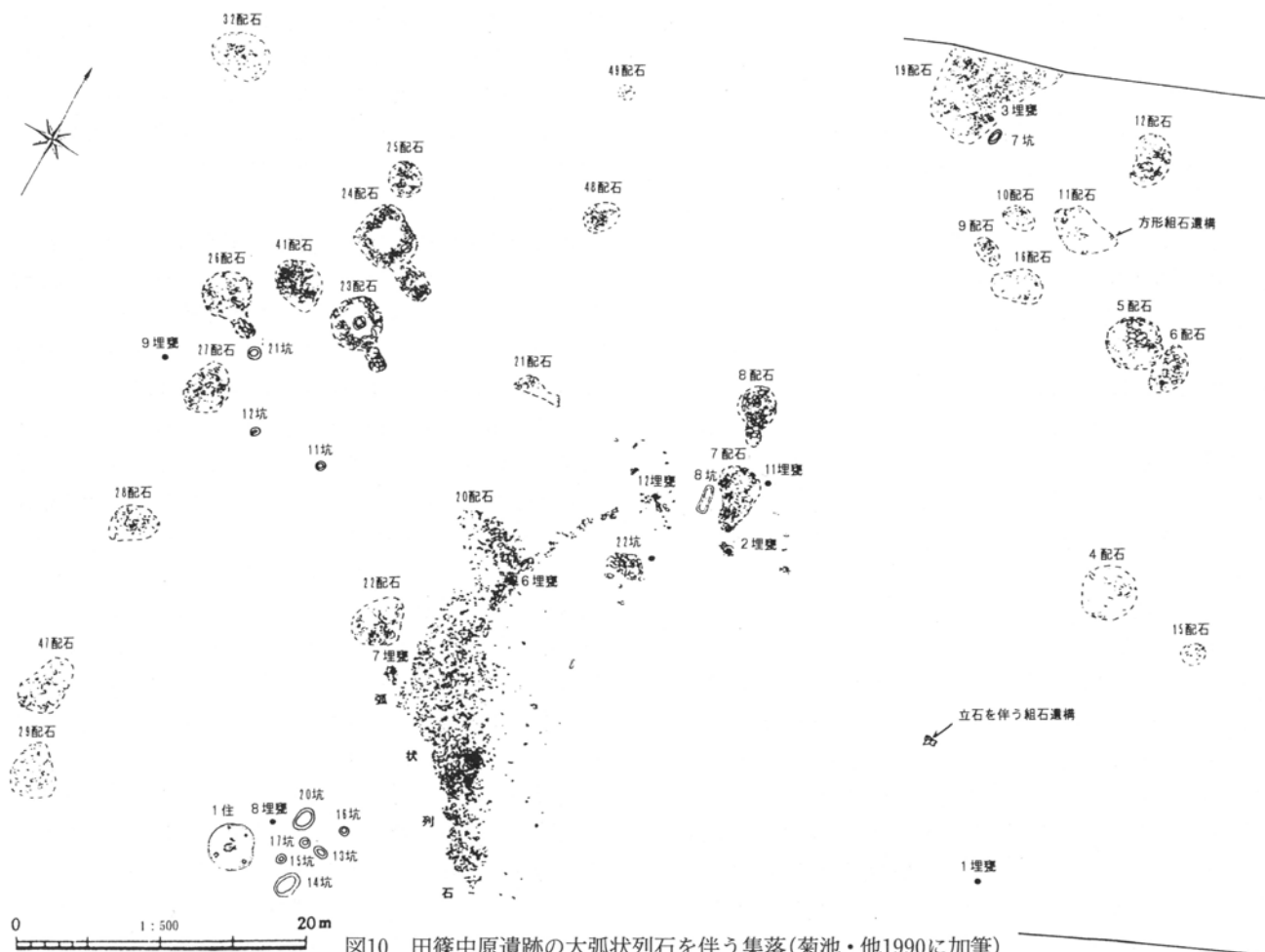


図10 田篠中原遺跡の大弧状列石を伴う集落 (菊池・他1990に加筆)

の平坦面を上下にして縦位直列状に3～4段積み上げる古墳の葺き石に類似した「平積み」をしており、他とは異質な様相を呈している。一見すると、青森県小牧野遺跡の環状列石に見る「小牧野式」に近似するが、立石状の配置と平積みを交互に繰り返さない点でその違いは大きい。基本的に同一の手法ではなく、相互にその系統を違えていると考えられる。この「小牧野式」構築方法は、東北地方では既に中期末葉段階の環状列石に用いられていることが、山形県小林遺跡の環状列石¹⁰⁾(佐藤他1976)や青森県三内丸山遺跡の環状配石墓(佐々木2001)の事例から窺い知ることができる。しかし、こうした構築方法は、少なくとも中期末葉段階の当該域には採用されなかったと見て良い。

列石を構成する遺構 環状・弧状列石を構成する石材の配置状況を観察すると、その内部には小規模な不定形の配石や立石状の大形礫を中心とした小配石などが点在し、それを列状配石で連結するような状況が認められる。こうしたあり方については、既に田村公夫により指摘されているが(丸山1985・田村1998)、横壁中村・久森・東平井寺西・田篠中原などの大規模環状・弧状列石だけでなく、白川傘松遺跡などの小規模弧状列石などにも認められる。また、一見整然とした列状配置で連続構成される野村遺跡のような環状列石でも、一定の間隔で2石配置を単位とするようなあり方が認められるようであり¹¹⁾、その内容にはやや複雑なものがある。いずれにしても、上記のようなあり方を含めて環状・弧状列石の構築は、単純な連続的作業でなされたものではなく、小規模配石を単位として、それを連結するようになされたものと考えられる。

また、その構築に当たっては複数の基点が存在した可能性も想定される。後述する後期の浅田遺跡(図19-d)では、柄鏡形敷石住居の右側に接続する列石に段違い状の不連続とそれを修復するかのような不自然な配列が認められており、相互に基点を違えたために生じた齟齬の可能性が窺える。

立石については、大形石棒を用いる例が野村遺跡に認められるが、久森・田篠中原・坂本北裏などの遺跡では、棒状の大形河床礫を立位にしたものである。列石内におけるこうした立石の配置に関しては、野村遺跡で季節的な日の出・日没などの太陽の運行との関係が指摘されているが(千田・小野2001)、実証的な検討が必要なこともあり、ここでは立ち入らない。また、後述するように、列石内には他の石材に混じって男性原理や女性原理を象徴する石棒や多孔石などが多数存在し、生命や生産に関わる呪術や祭祀的な要素が濃厚に認められる点は重視する必要がある。

埋設土器については、列石下に存在する例が久森・田篠中原・坂本北裏などの遺跡で確認され、比較的大規模

な環状・弧状列石に伴出していることから、相互の密接な関係性が想定される¹²⁾。一方、野村遺跡では埋設土器ではないが、中央部の環状列石下に4体の深鉢土器を破碎して敷き詰めたような状態が認められ、その構築に先立って何らかの儀礼的行為が存在したと考えられる。また、環状列石下ではないものの、それに近接して5基の埋設土器と地面に逆位に置いたような伏甕5基が検出されており、先の例と同様に大規模な環状列石との関係が窺える。このような列石に伴う埋設土器については、幼児埋葬ではなく「祭祀用具・施設として機能した」(山本1977)とされているが、伏甕も含めて祭祀的用途が想定される。

また、環状や弧状の列石で囲繞される内側のエリアには、各遺跡ともに同時期の遺構は何ら存在せず、広場状の空間部が形成されていたと見て良い。土器や石器などの遺物出土についても極めて希薄であり、外縁部の状況とは一線を画することができる。

環状・弧状列石の構築順序 久森遺跡や野村遺跡のように、隅丸方形列石を中心にしてその外縁部に同心円的な弧状列石を複数配置するケースでは、その構築順序のあり方が問題となろう。この点については、図8・9に示したように列石下の埋設土器や近接あるいは重複する柄鏡形敷石住居の時期から判断できる。

久森遺跡では、中央部の「内縁環状列石」はその外縁に近接する加曽利E3式IV期の2・4号住居から同式期に、また「外縁環状列石」は西端列石下の加曽利E3式IV期の埋設土器や列石と融合的に配置される加曽利E4式期の1号住居から同E3式IV期～同E4式期にそれぞれ比定される。

野村遺跡の場合は、中央部の「環状列石」は北側列石下に意識的に破碎・遺棄された加曽利E3式IV期の土器群から同期に、「列石2」はその南側に加曽利E3式IV期のJ-18・J-21・J-22などの住居が並び、列石を挟んでその北側に加曽利E4式期のJ-11～J-15などの住居が位置することから同E3式IV期～同E4式期に、「列石1」は先の加曽利E4式期の住居群が南側に位置することや、その1棟のJ-14が列石と融合的に配置されることから同E4式期にそれぞれ比定できる。

この両遺跡では、まず中心部の隅丸方形的な環状列石が加曽利E3式IV期に形成され、その外縁部の弧状列石については、環状列石に近接するものから順次構築されていったことが解る。

このように、重層構造を有する大規模な環状列石においては、その構築順序に内環→外環への明確な方向性が認められことを重視しなければならない。また、弧状列石ながら重層性をもつ横壁中村遺跡や空沢遺跡などでは、列石下の埋設土器や出土土器の状況が不明瞭であり、現段階では上記と同様の構築順序が存在するのか否か判



図11 横壁中村遺跡の大弧状列石を伴う集落 (群埋文1996)



図12 空沢遺跡の大弧状列石を伴う集落 (大塚1993)

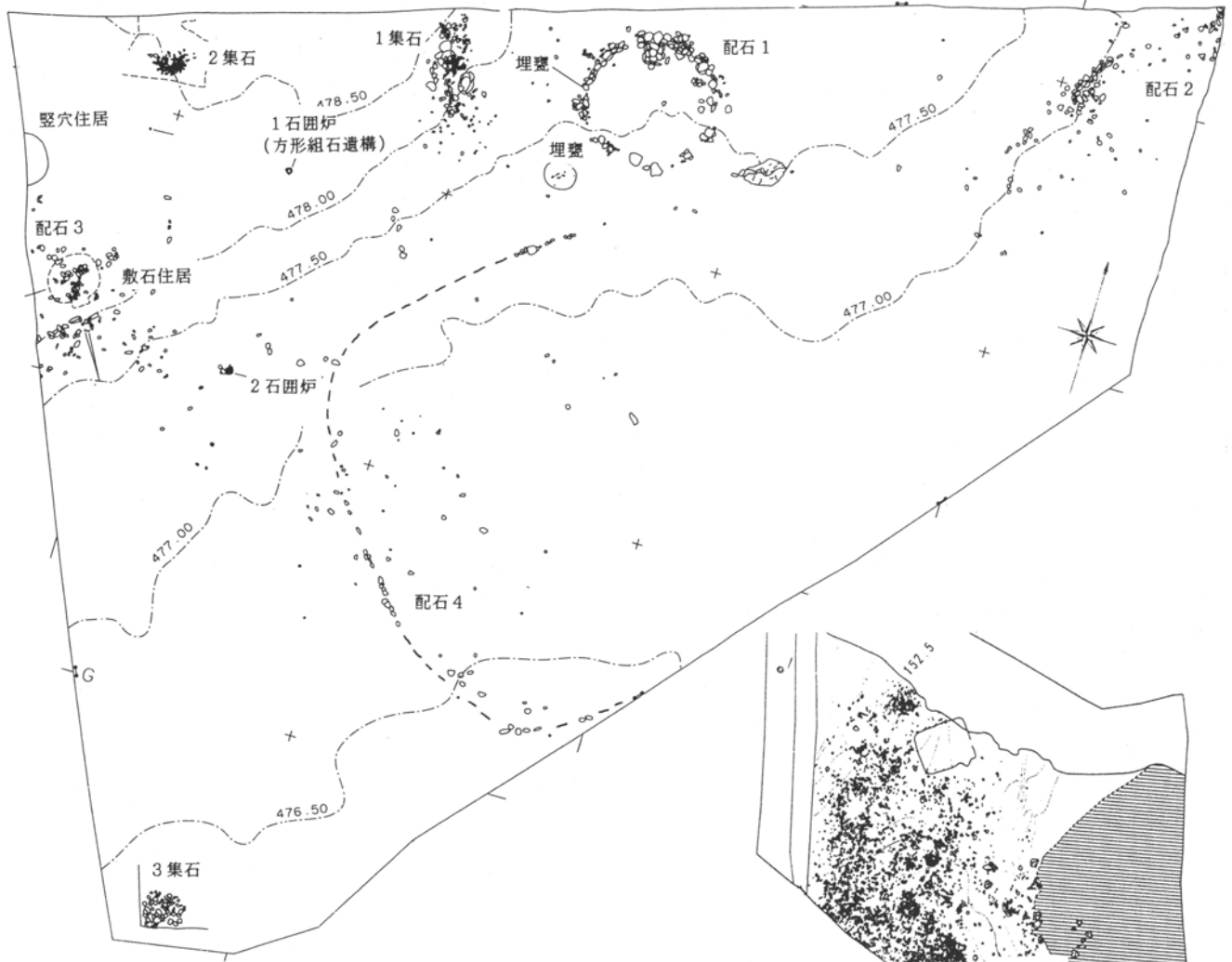


図13 坂本北裏遺跡の環状・弧状列石を伴う集落（金子・他1999に加筆）



図15 長久保大畑遺跡の小弧状列石を伴う集落（田村・他2000に加筆）

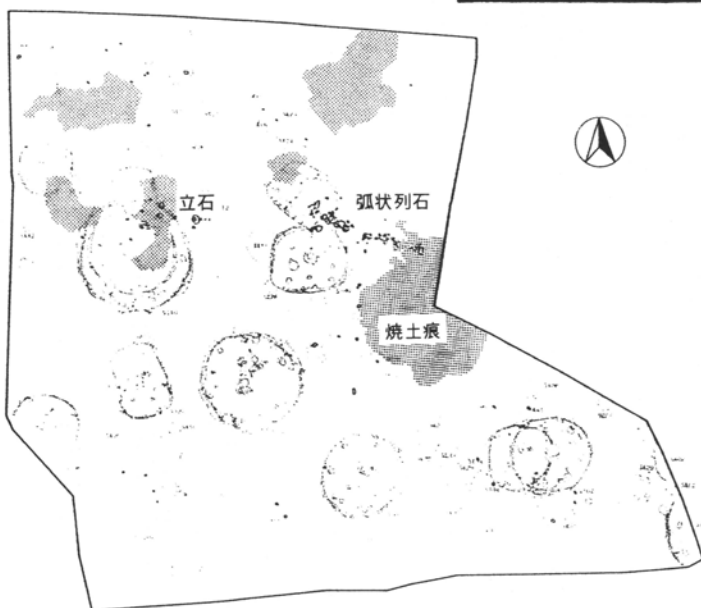
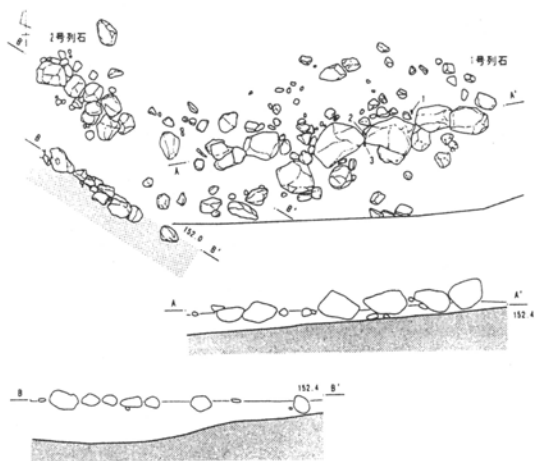
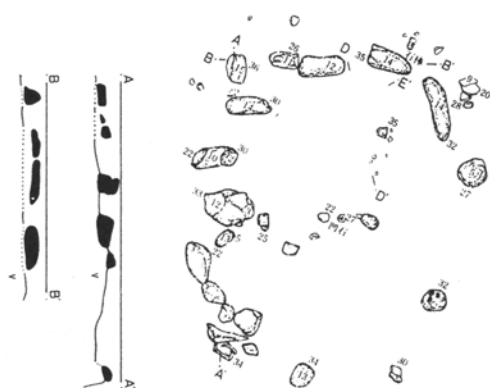


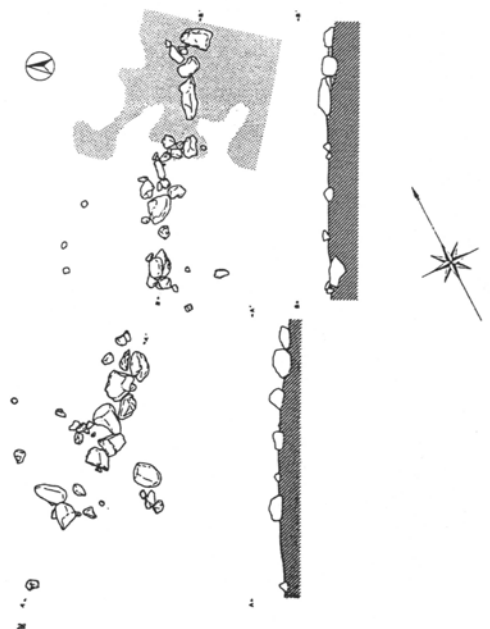
図14 坪井遺跡の小弧状列石を伴う集落（富田2000に加筆）



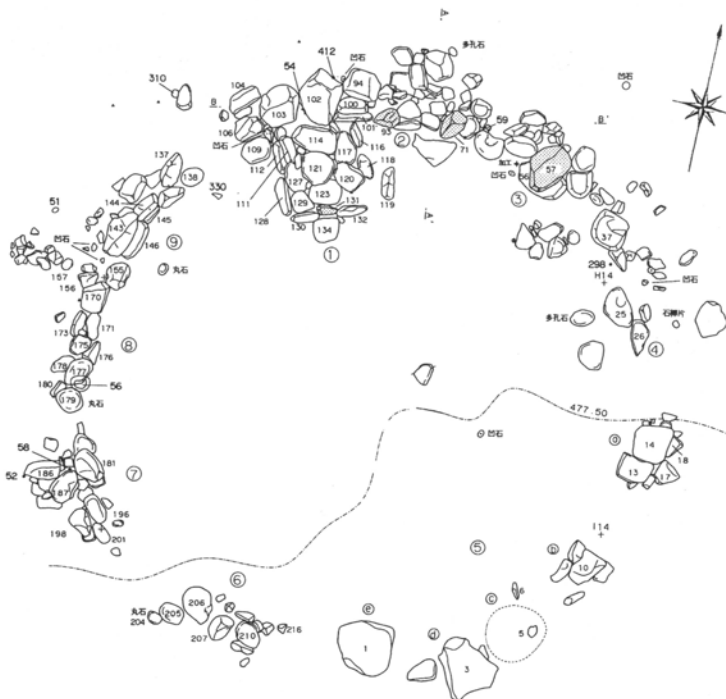
a. 長久保大畑遺跡1・2号列石



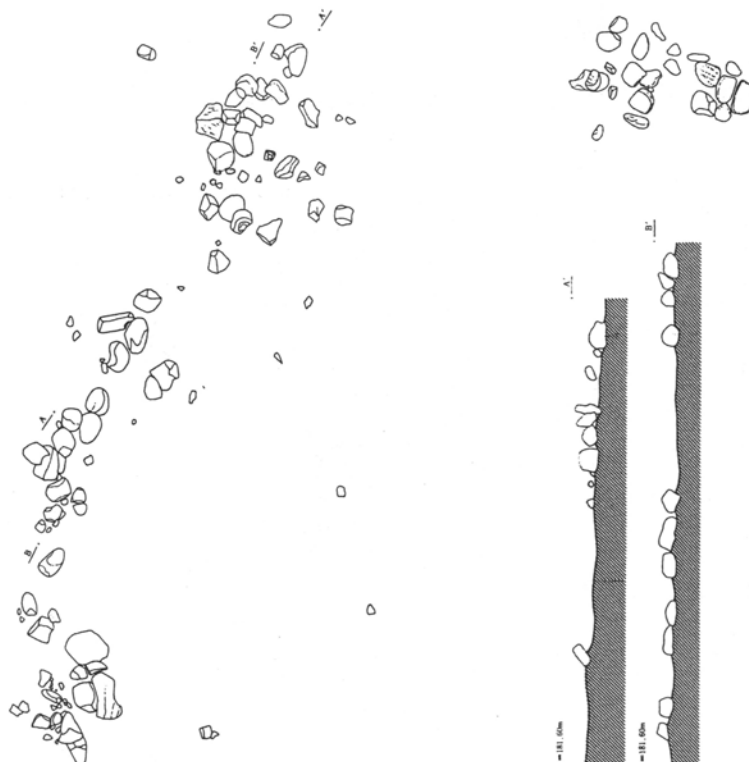
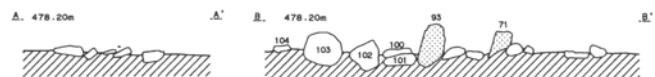
b. 三原田遺跡1区75号配石



d. 坪井遺跡 弧状列石



c. 坂本北裏遺跡配石 1



e. 白川傘松遺跡2号石組列・1号配石

図16 各遺跡の小環状・弧状列石

断できない。しかし、久森・野村の両遺跡に共通するいわば「原理」とも言えるものであり、その可能性は高いと思われる。

切り・盛り土による整地行為 環状・弧状列石の築造に伴って、傾斜面上方の地表を掘削して下方へ盛り土し、数段の平坦面を造成するような整地行為が野村遺跡で確認されている。当遺跡の平石積みは、その掘削面や盛り土端部の法面を被覆するように構築されており、かなり大規模な土木的工事を行っていることが解る。他に久森遺跡などでもそうした整地行為が存在した可能性を想定できるが、明確なのは現在のところこの1例のみである。青森県小牧野遺跡では、環状列石の構築に際して平坦地を意識的に避けて斜面地を選定し、地面の掘削・整地作業をしていることが指摘されている（小林1995、遠藤1997）。野村遺跡では周辺の地形全体が斜面地でもあり、そうした意識的な選択の有無を判断することは難しいが、掘削・整地工事に多大な労力を投下してまで同地点に固執するあり方には、各集団の領域関係のみでは理解できない背景の存在を窺わせる。

集落内における構築位置 環状・弧状列石の構築が、集落内のどの地点を占地しているのかは、規模や形態によって差異が認められる。まず、I A類の大規模かつ隅丸方形的環状列石をもつ野村遺跡や久森遺跡では、柄鏡形敷石住居がその外縁部に配置されており、環状列石が集落の中心部に位置することが解る。I B類の大規模な弧状列石をもつ田篠中原遺跡でも同様な状況が認められるが、空沢遺跡の場合には集落端部の斜面下方に位置するようであり、いわば集落の外縁部に弧状配置されると考えられる。横壁中村遺跡例も、この空沢遺跡例に類似する様相を呈している。II A・B類の小規模な環状・弧状列石の三原田・白川傘松・下鎌田などの遺跡では、前段階の環状集落の中央空閑部とは直接的な関係は認められず、加曽利E 3式IV期や加曽利E 4式期の住居に近接したあり方を示している。白川傘松遺跡の1・2号配石（図4）はかつての中央空閑部に位置するようにも見えるが、むしろその北側に存在する中央空閑部へと侵出した柄鏡形敷石住居（II地区1住）との近接関係でとらえるべきであろう。なぜなら、その東側50mには中央空閑部とは関係しない7号配石が存在し、それに近接して3棟の柄鏡形敷石住居（同9・10・17住）が認められるからである。このように、規模の大・小や形態などの差によって、集落内における配置状況に差異が認められる点は、各環状・弧状列石が集落内において担っていた機能・性格の差を反映したものである可能性が高い。

(2) 環状・弧状列石の外縁部の遺構状況

墓坑・方形状組石・集石土坑・配石遺構等のあり方 環状・弧状列石の外縁部には、柄鏡形敷石住居を始め様々な遺構が存在するが、規模の大小によってその構成内容

にはかなりの差異が認められる。

まず、墓や墓坑については、列石内あるいは列石下に存在する事例は皆無であり、基本的に中期末葉の環状・弧状列石には付随しないと見て良い。ただし、その外縁部には上部に標石状の立石や小配石を伴う墓坑の存在するケースが、坪井・三原田・白川傘松・坂本北裏・東平井寺西・田篠中原（図17-h）・下鎌田などの多くの遺跡で認められる¹³⁾。こうした標石状の配石を伴う墓坑は、中期後半段階の集落内に既に認められるものであり、環状・弧状列石を伴出する集落のみに随伴する要素ではないが、同時期の加曽利E 3式IV期や同4式期の小規模集落には希薄でもあることから、相互に何らかの関連性を持つことが予測される。またそれらの遺跡における墓坑は、柄鏡形敷石住居の周辺部に散在する状況を呈し、特定の区域に集中したり整然とした配列などが認められないことから、集団墓は形成されていなかったと考えられる。

一方、野村遺跡や久森遺跡などの大規模環状列石を伴う集落では、墓坑の存在が希薄となっている。久森遺跡は部分的な調査であることから、未調査区域に存在する可能性もあるが、野村遺跡の場合には周辺部での確認ができないようである¹⁴⁾。現段階での明言はできないが、大規模環状列石を伴う集落の墓域は、廃屋墓や集落外に存在した可能性を考慮する必要もあるだろう。

墓坑と同様に、環状・弧状列石と直接的な位置関係を持たないものに、方形状の組石遺構と集石土坑の存在がある。前者については、径20～30cmの丸石や長さ1m弱の棒状礫を中心に据えてその周囲を方形状に石囲いするもので、その下位には墓坑などの施設を伴わない特徴を有する。田篠中原遺跡（図17-b・c）と坂本北裏遺跡（図17-a）で計3例が確認されている。丸石を囲繞するのは、形態的に石組炉に類似することから炉と誤認されたりしているが¹⁵⁾、後述する浅田・前中後・行田梅木平などの後期遺跡の列石や配石墓内にも存在しており、それらの祖型的なあり方を示すものとして注目される。また、この組石遺構は、丸石と立石を中心とする2タイプに分離され、各々が次段階へと変遷すると考えられる。

集石土坑については、長久保大畑（図17-e・f）・白川傘松・坂本北裏・東平井寺西・田篠中原の各遺跡で検出されているが、特に東平井寺西遺跡では5～10基と多数が存在し¹⁶⁾、明瞭に被熱を受けたものが認められることから、何らかの調理的な行為がなされたと推察されるとともに、大規模な環状・弧状列石に多数基が随伴する点で注意を要する。こうした遺構は、縄文時代の集石遺構を分析した谷口康浩の分類に準拠するならば、「I群乙種」に比定されるものであり、前期の阿久遺跡を例として「儀礼的炊爨が、葬送に際して個々に演じられた」遺構の可能性が指摘されている（谷口：1986a）。葬送云々

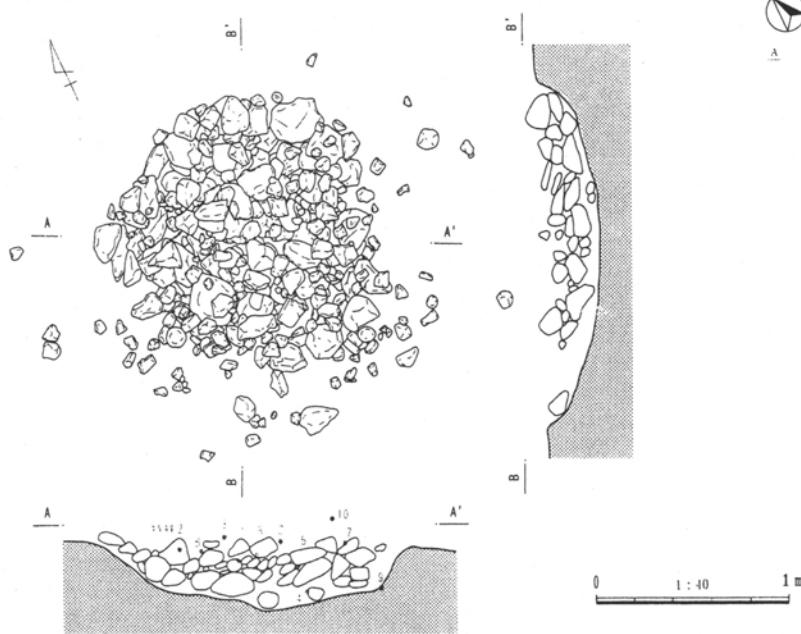
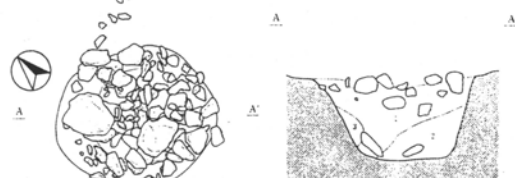
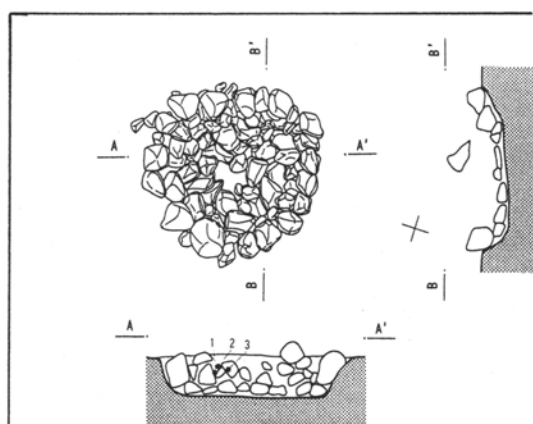
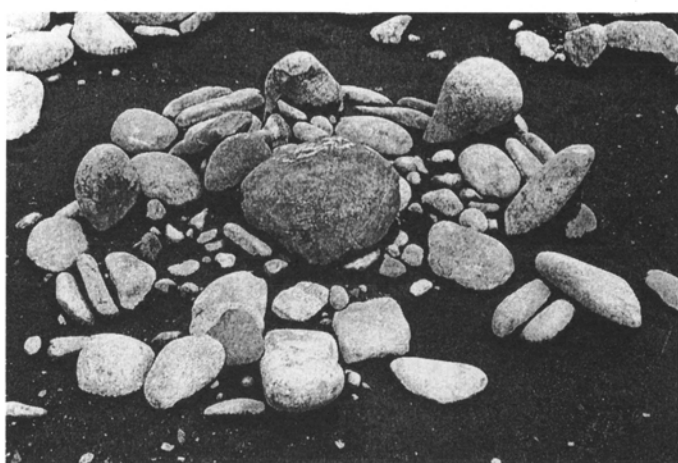
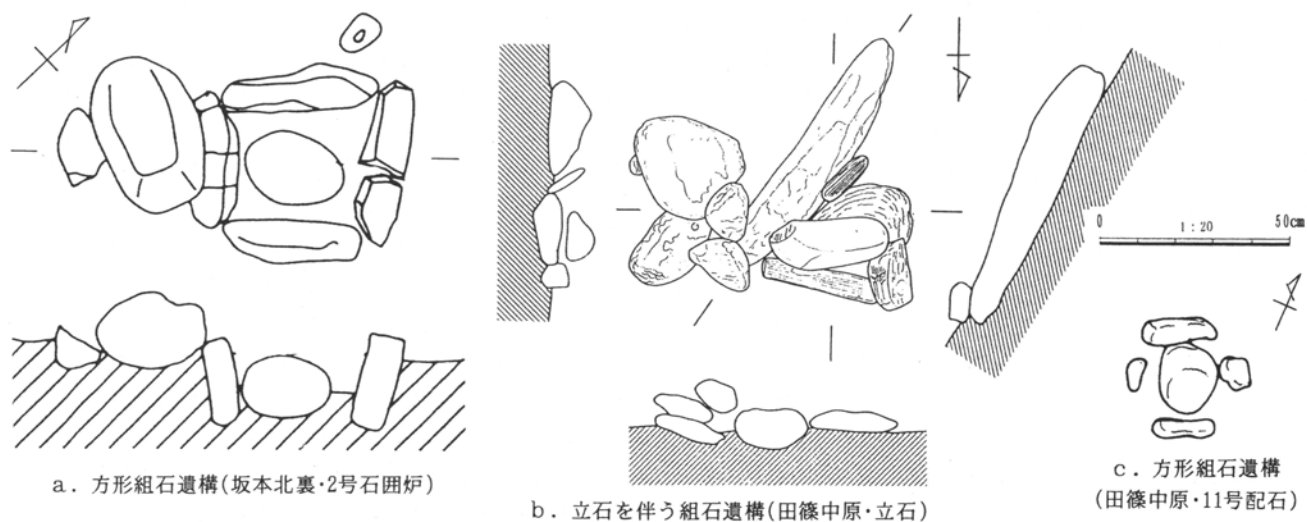


図17 環状・弧状列石の周辺部に存在する遺構 (方形・円形組石遺構、集石土坑、墓坑)

や集石土坑の全てが儀礼的な目的のみに使用されたか否かは別に置くとして、中期末葉の環状列石でもこのような集石土坑による「儀礼的炊爨」行為の存在を認定することができよう。これに関連するものに、田篠中原遺跡の柄鏡形敷石住居や環状列石を構成する石材における被熱痕、坪井遺跡の弧状列石周辺部での焚火行為などの存在がある。環状・弧状列石内やその周辺からの焼骨片の検出事例はないが、集石土坑なども含めて儀礼的な行為に伴う火の使用がなされたことが想定される。

列石や配石墓とは区別される配石遺構が外縁部に存在するとされる事例は、長久保大畑遺跡で8基が、田篠中原遺跡で36基がそれぞれ報告されている。掲載写真や実測図などの報告内容から見る限り、両遺跡例ともに用石の配置状況は極めて散在的であり、各々が確実な遺構として認定できるだけの要件を満たしているとは思えない。遺構確認面が現地表から浅いことにより、柄鏡形敷石住居が攪乱・破壊されたものであることも想定され、その認定に当たっては慎重を期すべきであろう¹⁷⁾。ただし、環状・弧状列石の外縁部に円形や方形の配石遺構が存在する可能性を否定するつもりはない。なぜなら、山形県小林遺跡の中期末葉の環状列石外縁部には、長辺4.4×短辺3.0mの方形の配石遺構が併存するからである。

報告内容に不備な点が多いことや各遺構の時期が確定できないこともあり、前述の分析項目の中では取り上げなかったが、坂本北裏遺跡(図13)ではそのような環状列石と配石遺構との関係を窺うことができる。報告者は、「環状配石1」を中心にして「配石2～4」がそれを圍繞するような二重の環状構造を想定しているが、遺構配置からはそのような認定は困難である。詳細な図や記載がないためにこの全体図から判読せざるを得ないが、断続的ながら南北及び東方向へと延びる「配石4」の列石を繋げるならば、点線で示したような隅丸方形の列石形態が浮上してくる。これは野村遺跡や久森遺跡の環状列石と同一形態であり、この場合「配石1」はその外縁部に位置することになる。「配石2・3」は、敷石住居との重複や部分的な検出であるために判然としないが、「列石3」の場合はやや小規模ながらも「配石1」と同様の円形状配石となる可能性もある。各配石の時期については、「配石1」が列石下位の埋設土器により、また「配石3」がその下位の敷石住居との関係から、ともに加曽利E3式末葉段階よりも新しいことは確実であるが、伴出土器には堀之内1式も少なからず認められることから確定することは難しい。仮に、これらの配石が中期末葉の同時期に比定されるならば、大規模環状列石に小規模環状列石が付随する構造を持つことになる。こうした想定が正しければ、田篠中原遺跡などにおいても同様の配置構造が存在した可能性は残ることになるだろう。

上記以外には、転石状の大形礫を圍繞するように小形

礫を不規則に配置するような事例が、坂本北裏遺跡で一例確認されている。図13の「1号集石」とされているものであり、特定の礫を圍繞するあり方に先の方形組石遺構との類似性も感じられるが、これが他の列石と同様に意識的な配置なのか否か、見極めるのが難しい。山体からの垂角礫の転石供給を受けて、人為的な配石との区別が難しい横壁中村遺跡でも類例が存在するようで¹⁸⁾あり、列石構築時に邪魔な石材を巨石の周辺部に集積しただけの可能性もある。従って、現段階では環状列石の外縁部を構成する遺構としての認定を差し控えておきたい。

柄鏡形敷石住居との関係 これら以外の遺構としては、柄鏡形敷石住居との関係がある。注意されるのは、環状や弧状列石と重複するケースであり、久森遺跡の「外縁環状列石」と1号住居(図9)、野村遺跡の「列石1」とJ-13号住居(図10)などの例のように大規模なIA類の環状列石にのみ認められ、弧状列石のIB類や小規模なII類には認められない点である。この両者の重複関係は、それが時間的な新旧関係によるのか、あるいは両者が融合・一体化したものなのかを識別するのは難しいが、後述するような後期前半段階の弧状列石と柄鏡形敷石住居との融合的なあり方から見て、中期末葉段階に既にその祖型的な関係が成立していた可能性はあるだろう。特に、この両遺跡例では、加曽利E3式IV期の柄鏡形敷石住居が中心部に位置する隅丸方形列石およびそれに近接した弧状列石とは重複せずに、一段階時期の下った加曽利E4式期の、しかも特定の柄鏡形敷石住居と最外縁部の弧状列石のみが重複関係を持つ点は、環状列石構築の最終段階にて生じたことを示すものであり、後期への過渡的様相として注目される。

環状・弧状列石と住居配列との関係は、大半の遺跡が部分的調査であるために確定できないが、集落中心部に大規模環状列石を有する久森遺跡や野村遺跡では、外縁部の斜面上方に同段階の柄鏡形敷石住居が集中し、いずれも出入口を環状列石の中心部へ向けている。また、先に類似してその中心部に弧状列石を配する田篠中原遺跡では、弧状列石の北西部外縁に柄鏡形敷石住居が集中し、やはり出入口を弧状列石の中心方向に合わせているものが多い。しかし、大規模な弧状列石の中でも空沢遺跡のように、弧状列石が集落の外縁部に配置される場合には、それらのような関係は認められない。また、中心部との関係性の希薄な小規模環状・弧状列石においても同様である。こうした例からみて、中心部に大規模な環状・弧状列石が位置する集落では、住居の入口方向はその中心方向に規制される状況が認められるが、中心部との関係が希薄な弧状列石を伴う集落の場合は、その規模の大小に係わらず先のような求心的住居配列にならないことが解る。ただし、この両者のケースにおいても、各住居は環状列石あるいは弧状列石を圍繞するような配列をもた

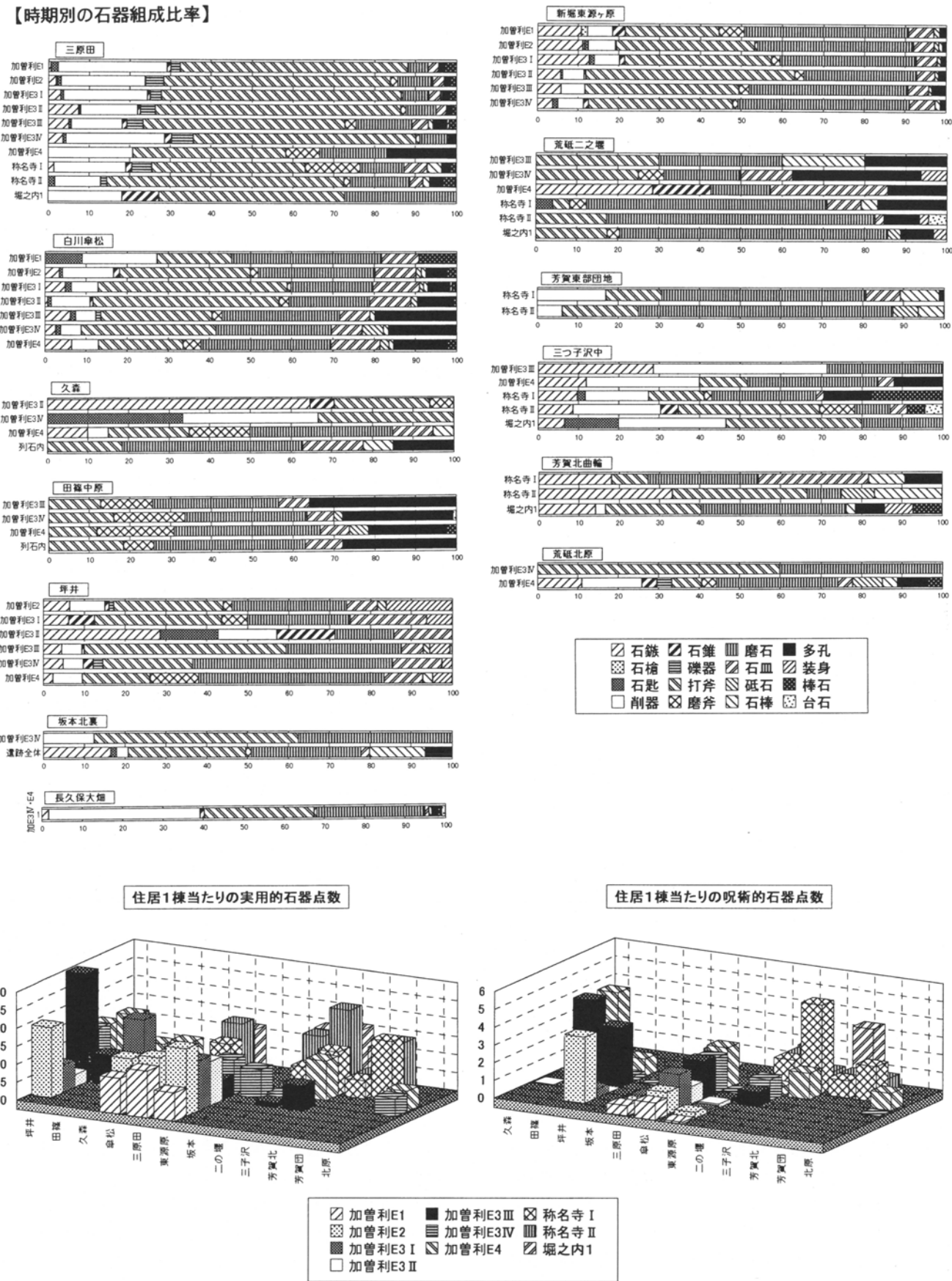


図18 集落遺跡における時期別の石器組成

ないことが想定できる¹⁹⁾。つまり、加曽利E3式Ⅲ期まで存在した環状集落のような居住帯構成は、環状・弧状列石を伴う集落には認められないと言うことであり、両者における「環状原理」は相互に異質なものであることを示している。

4 環状列石を伴う集落の機能・性格

(1) 環状・弧状列石を伴う集落の石器組成

環状・弧状列石を伴う集落は、その遺構内容や石棒・多孔石などの呪術的遺物の多さに因って、従来から特殊な性格を付与されてきたが、必ずしも詳細な諸属性の分析・検討を経てそうした結論が導かれてきたわけではない。ここでは、環状・弧状列石を伴う集落だけでなく、同時期の代表的な小規模集落や環状集落における石器組成²⁰⁾を分析し、それら相互の異同や特殊性の実体を検討してみたい。ただし、石器の組成内容により各遺跡の生業形態や性格を見定めることは、かなり難しいことである。それはこれまでも指摘されてきているように、遺跡外で消費・廃棄される石器が少なからず存在することが想定され、遺跡内に遺棄された石器群が当時の組成内容を直接指示しないからである。また、各遺跡における石器の分析サンプル数の違いによる誤差も、かなり大きなものであることが予測される。こうした点を踏まえれば、以下の分析結果も判断材料の一つに過ぎないことになるが、おおよその傾向を把握することは可能と思われる。

尚、分析対象遺跡の柄鏡形敷石住居出土の石器を中心に、各時期別の組成比率と住居1棟当たりの時期別石器保有数を図18に示した。

環状・弧状列石を伴う集落の石器組成 大規模な環状・弧状列石を伴う集落（以下、大環状・弧状列石集落と呼称）例に久森・田篠中原・坂本北裏の3遺跡を、小規模な環状・弧状列石集落（以下、小環状・弧状列石集落と呼称）例に坪井・長久保大畑・三原田・白川傘松の4遺跡を取り上げたが、他については未報告あるいは石器の出土数が不明記であったりするために除外した。各遺跡とも出土量が少ないために個別的な差異がかなり著しいが、前段階に環状集落が存在した三原田・白川傘松の2遺跡でも加曽利E3式Ⅳ期～同E4式期の各出土総量は100点前後であり、さほど大きな差はない。呪術的石器としての石棒や多孔石は、田篠中原遺跡では各時期を通じて30～40%弱の高い比率が認められ、やや特異なあり方を示すが、久森・坂本北裏・坪井の各遺跡では10～20%、長久保大畑遺跡では5%に満たない。三原田遺跡では、加曽利E4式期に多孔石を主体として20%近い比率が認められ、かなり急激な増加現象を看取できる。白川傘松遺跡でも加曽利E3式Ⅳ期にそのピークがあるが、弧状列石出現期以前の加曽利E3式Ⅲ期にも近似する比率が認められ、漸増的現象であることが窺える。

一方、削器・打製石斧・磨石類・石皿などの実用的石器は、各遺跡ともに70～80%を占め、その中でも打製石斧や磨石類の比率が高い。こうした傾向は、久森遺跡や田篠中原遺跡などの環状・弧状列石を構成する石材内に含まれる石器のあり方でも、ほぼ同様に認められる²¹⁾。また、田篠中原遺跡を除いて、各遺跡に5%前後の石鏃が組成する点は注目される。

こうした組成比率を、住居1棟当たりの石器保有数に置き換えてみると、呪術的石器はやはり田篠中原遺跡で2.2～4.7個と多いが、坪井遺跡でも0.3～3.3個とそれに類似した数量が認められる。実用的石器については、坪井遺跡を除いて各遺跡とも5～16個と大差なく、先の比率で検討したのと同様の傾向が認められる。坪井遺跡の加曽利E3式Ⅲ期に63個という突出した数量が認められるが、これは1棟からのやや特殊な出土であり、サンプル数が僅少なことに因る例外的なものであろう。

小規模集落の石器組成 次に環状・弧状列石を伴わないが、柄鏡形敷石住居を主体とする小規模集落における石器組成のあり方を見てみよう。加曽利E3式～堀之内1式期までの代表的な遺跡として、荒砥二之堰・三ツ子沢中・芳賀北曲輪・芳賀東部団地の4遺跡と前段階に環状集落が存在した新堀東源ヶ原遺跡を取り上げたが、出土数量の少ないのは先の環状・弧状列石を伴う集落と同様であり、やはり各遺跡相互の差異が著しい。呪術的石器の石棒や多孔石は、荒砥二之堰遺跡では加曽利E3式Ⅲ期に40%のピークが存在し、以降減少して10～30%台を前後する。同期の新堀東源ヶ原遺跡や後期初頭の芳賀東部団地遺跡における比率は10%に満たないが、三ツ子沢中・芳賀北曲輪の2遺跡では10～25%を前後しており、相当の保有状況が窺える。実用的石器については、呪術具の多い荒砥二之堰遺跡を除き、各遺跡ともに磨石類や打製石斧を主体に70～80%台を占めるが、その内の10～20%台は石鏃が占めている。

住居1棟当たりの石器保有数の状況を見ると、呪術的石器では三ツ子沢中遺跡で1.5～5.0個とかなり突出し、上記の田篠中原遺跡例に匹敵する保有量を持つ。実用的石器では、各遺跡ともに5～10個程度とあまり大きな差は認められない。

各集落の異質性と同質性 以上のように、各遺跡における総体的な石器組成のあり方から見ると、特定の遺跡を除いて大環状・弧状列石集落と小環状・弧状列石集落および小規模集落との相互間には、大きな差異は認められないのではないだろうか。例えば、「第二の道具」としての石棒や多孔石のあり方を見ても、田篠中原遺跡で突出するものの、それは環状・弧状列石集落全体に認められる現象ではない。また、同期の小規模集落である荒砥二之堰遺跡や三ツ子沢中遺跡などにも多数の保有が認められ、住居1棟当たりに換算するならば田篠中原遺

跡との差はそう大きなものではない。

換言するならば、田篠中原遺跡のような大弧状列石集落に呪術的石器が多量保有される傾向は認められるものの、小規模集落にも多数の呪術的石器を保有する遺跡が存在することは、その保有が環状・弧状列石の有無に規制されたものではない可能性を示唆している。総体的に見れば、呪術的石器が増加するのは加曽利E3式期～加曽利E4式期における集落に通有な事象と考えられよう。

一方、実用的石器については、田篠中原遺跡でも加曽利E3式～同E4式期の住居1棟当たり5.9～16.5個が認められ、その保有数は他の小規模集落よりもむしろ多いと言って良い。

他の環状・弧状列石集落遺跡での分析サンプル数が少ないこともあり、田篠中原遺跡例をもって環状・弧状列石集落の生業形態を云々することはできないが、少なくとも他の小規模集落と類似する生業活動や生活が存在したと想定することはできよう。そうした点では、環状・弧状列石の有無にかかわらず、各集落遺跡に共通する同質性を認め得るのではないだろうか。

(2) 環状・弧状列石を伴う集落の規模

環状・弧状列石出現期以前の集落様相 環状・弧状列石が形成される集落遺跡では、その出現以前にどのような直接的契機が存在したのかを、各遺跡における居住や集落の動向から分析することも重要であろう。表1に示したように、大環状列石集落の野村遺跡や久森遺跡では、加曽利E3式II期に小規模集落が形成されるが、単発的でその後に居住の断絶が認められる。また大弧状列石集落の田篠中原遺跡では、加曽利E3式III期以前には集落形成がなく、しかも当該期の集落規模も小さい。小環状・弧状列石集落の場合、三原田・白川傘松・下鎌田などの環状集落遺跡のように、中期初頭～末葉にかけて長期継続的かつ大規模な居住が存在するものと、坪井遺跡のように加曽利E2式期～同E3式III期にかけて若干の継続性を持つ小規模集落に分かれる。これら以外に、その詳細が不明な大弧状列石集落の横壁中村遺跡や空沢遺跡などの例があるが、ここでは加曽利E1式期～同E3式III期にかけての中規模程度の集落が形成されるようである。

これらの事例から見ると、大弧状列石集落や小環状・弧状列石集落には幾つかのパラエティが認められ、斉一的な様相を窺うことは難しいが、大環状列石集落の場合にはその形成期直前段階には集落が存在しない居住空間地になっている状況を看取することができる。また、別な観点からとらえるならば、大環状列石集落は環状集落跡地に立地することはなく、小環状・弧状列石集落の場合にはその形成が前段階の集落規模に何ら影響を受けていないことを明示するものでもあろう。

このように、環状・弧状列石集落の形成がその直前段

階の居住動向に左右されないあり方は、加曽利E3式IV期において新たに生じた文化的動向を直接反映したものであることを窺わせる。これは先に見てきたように、加曽利E3式IV期に新たに出現する上原・三角遺跡や荒砥北原遺跡などを始めとした小規模集落の立地動向と共通するものでもあり、両者が文化的な相関・運動性の中で存在したことを示している。

環状・弧状列石存続期の集落規模 次に、環状・弧状列石における規模・形態や配列の重層性などの様態差と集落規模とが、どのような相関性を有するのかについて見てみよう。集落の全面調査を行っているのは、大環状列石集落の野村遺跡と小環状・弧状列石集落の三原田遺跡・下鎌田遺跡のみであるが、下鎌田遺跡はその報告内容に不備が多いことから除外し、2遺跡におけるおよそその傾向を見てみたい。

まず、大環状列石集落の野村遺跡では14棟の柄鏡形敷石住居が存在し、その内の3棟が加曽利E3式IV期、5棟が加曽利E4式期、他の7棟は時期不明であるが、後期の土器を含まないことや柄鏡形敷石住居の出現期から考えて、この時期不明のものもどちらかの時期に帰属することは確実であろう。とすれば、各期ともに7～8棟前後の規模となるが、各住居は5m以内に近接することから一時期の規模は5棟前後であろう。小環状・弧状列石集落の三原田遺跡は、加曽利E3式IV期が19棟、同E4式期が14棟であるが、住居相互間で重複や近接状況が認められ、一時期の規模は各時期ともにその半分以下、つまり6～8棟前後となることが推定される。ワンモーメントの集落規模を確定することはなかなか困難なことであるが、こうした想定が正しいと仮定すれば、大環状列石集落と小環状列石集落とは、居住規模にそう大きな差異が認められないことになろう。ただし、この場合の小環状列石集落は、環状集落跡地に形成されるものであり、坪井遺跡の小弧状列石集落例とはまた異なる可能性もある。

いずれにしても、大環状列石集落の居住規模は、同時期の上原・三角遺跡や荒砥北原遺跡などの小規模集落を若干上回る程度であることから、少なくともかつての環状集落のような集中的居住は存在しなかったと考えられる。

(3) 環状集落と大規模環状列石の相関性

環状集落の崩壊・消滅の意味 環状・弧状列石を随伴する集落の機能・性格を考察する前に、その出現前段階に存在する大規模環状集落の機能・性格を見定める必要がある。

前々項で詳述したように、群馬県域における中期の環状集落は17遺跡を数えるが、各遺跡とも勝坂3式期前後を環状形態の形成期として加曽利E4式期まで集中的居住が継続的に営まれるために、その痕跡が100～300棟ほ

どの大規模となるのが共通した特徴である。また、遠隔地から運ばれる黒曜石や硬玉製大珠などが多数認められ、稀少な交易品の集積・分配に関与した場所であることも窺える。利根川中流域の赤城山南麓端部や榛名山東麓端部などでは、環状集落の分布かなり集中する状況にあるが、相互に5～7kmほどの距離を置いて立地し、各環状集落を中心として領域が分割されている状況が看取される。これらの地域では、環状集落の周辺部に形成期を同じくする数多くの中・小規模集落の存在が明らかにされているが(石坂・原1984、鬼形1985、能登1986)、それらはいずれも環状の集落形態をとらない。

大規模な環状集落の機能・性格については、こうした文化的事象とともに、その出現が総体的な遺跡数の急増期と合致していることも重視する必要がある。このことについて小林達雄は、一定の領域内における単位集団数や居住人口の増加に伴い、それら集団構成員間の社会的関係を取り結ぶために「公共広場での共同行事を通じて、統合体としての紐帯を維持し、規律を確認する」場として、こうした環状集落を必要としたと見なしている(小林1986)。

このような見地に立てば、各環状集落に見る加曽利E3式IV期での環状形態の崩壊現象は、そうした集団内の共通観念や原理の崩壊を反映したものと理解できるだろう。換言するならば、そうした拠点集落の消滅は集団統合の場を失うことと同時に、旧来の統合原理がその効力を持ち得なくなったことを意味している。

こうした文化的変動は、既に指摘されてきたように東関東を除く関東地方全域や中部地方などでも確認されるものであり、人口増加に関わる内的要因と気候の冷涼化による自然環境悪化という外的要因を背景に、広域に生じた斉一的現象でもある(山本1977・1979・1981)。

同一時期に顕著な集落規模の縮小に見る散在的居住への移行は、直接的には環状集落の崩壊を契機とするものであるが、総体的な遺跡数の減少とも連動している点は、先のような要因を多分に反映した結果でもあろう。

環状列石を伴う集落出現の意味 中期末葉段階に環状・弧状列石が出現する背景については、従来多くの研究者により論述されてきたが、基本的には前述の外的・内的要因により困窮した状況を打破するために、「大地の恵みを祈る祭祀が発達し、祭祀の場として配石が活発に構築されはじめた」(山本1981)という考え方に集約されるだろう。前段階との文化的変移を大枠で説明するには、こうした考え方が有効性を持つが、多様な環状・弧状列石と集落との有機的関係を含めて詳述するためには、また別な視点からの分析が必要と思われる。

現在13遺跡で確認されている環状・弧状列石には、規模の大小やそれに付随した隅丸方形・円形・弧状などの形態のパラエティーが認められ、各遺跡が均一な内

容を有しているわけではない。隅丸方形の大規模環状列石は野村・久森・東平井寺西・坂本北裏²²⁾の4遺跡に、また大規模弧状列石は横壁中村・空沢・田篠中原の3遺跡にそれぞれ限定され、他は全て小規模な環状・弧状列石という状況にある。

こうしたあり方は、その分布状況にも反映されている。例えば、環状・弧状列石集落の分布密度が濃い西毛の簗川や碓氷川流域でのあり方を見ると、大環状・弧状列石集落は相互に10～15kmの距離を置いて点在し、その間隙を埋めるかのように小環状・弧状列石集落が散在している。またそれらの周辺域には、そうした環状・弧状列石を伴わない小規模集落も少なからず存在するという状況を呈している。これらの各集落を、構成内容の複雑さの度合いや数的な多寡を基準にして序列化すれば、大環状列石集落→大弧状列石集落→小環状・弧状列石集落→無列石小規模集落の順となろう。

このような序列的差異が、どのようなセトルメントシステムを指示しているのかが問題となる。各集落が小規模で分散的な居住形態を有することから見て、前段階の環状集落を中心とする集住的なシステムとは異なっていると考えなければならないが、加曽利E3式IV期から加曽利E4式期にかけた時期では、大環状・弧状列石集落が各領域内集団の結集点として、つまり拠点集落としての役割を担っていたと想定されるのである。

ただし、大環状列石と大弧状列石とでは、その構造や構築に関わる投下労働量に少なからず差異があり²³⁾、両者が同質の機能・性格を有していた訳ではないだろう。特に、大環状列石の場合には、前段階の環状集落跡地に継続立地しないだけでなく、前段階まで遺跡立地が存在しないような居住空間地を選定して立地するなどの傾向を有する点で、その違いは大きい。

それでは何故、大環状列石集落が環状集落跡地に立地しないのであろうか。先に見てきたように、前段階での各環状集落の斉一的崩壊は、各領域における集団統合原理や価値観の崩壊を社会的背景としていと考えられるが、それは同時に各領域内だけでなく隣接する領域間相互においても少なからず混乱や緊張関係を生起させるものでもあったろう。しかし、環状集落の崩壊を契機として、居住形態が集中的居住から散在的居住へと変化した後も各領域内においては居住が継続しており、単位集団だけでなく隣接する各集団との関係を取り結ぶための新たな統合原理が必要とされたことは明らかなことと思われる。つまり、環状集落の崩壊と軌を一にして出現する大環状列石集落は、それまでの統合原理や価値観の限界性を止揚して、新たな統合原理と価値観のもとに地域拠点集落として形成されたと考えられることができるのではないだろうか。

環状列石の出現そのものが、新たな観念や価値観の形

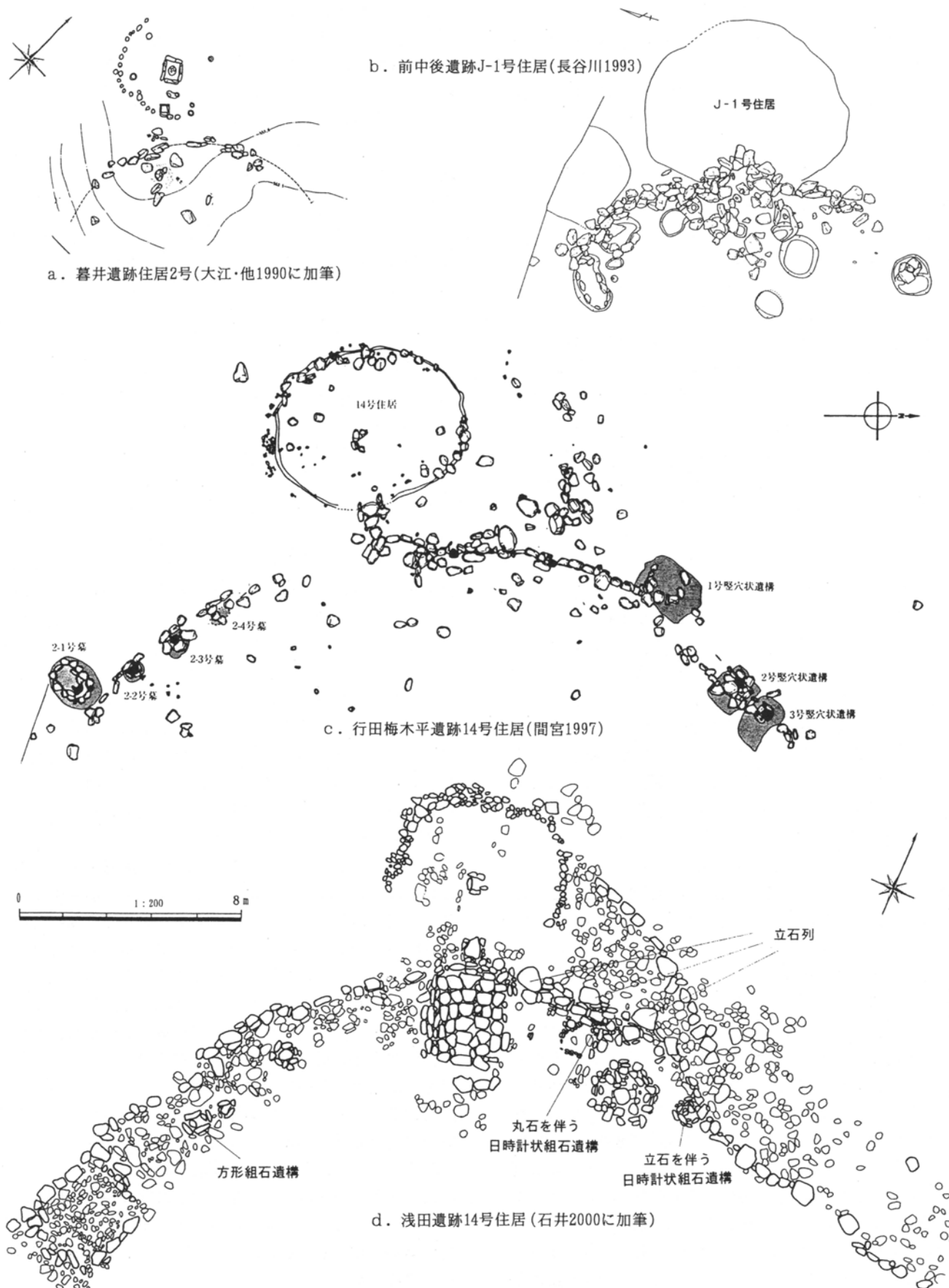


図19 後期前半の弧状列石と融合した柄鏡形敷石住居

成を背景にしていることは言うまでもないことであるが、大環状列石集落が環状集落跡地を避ける傾向や、居住空間を立地場所に選定している点などは、前段階の「穢れ」を嫌忌して新天地を希求した結果と見なすことも可能だろう。こうした大環状列石集落における立地傾向は、中部地方においても存在することが指摘されており（佐野・小宮山1994）、群馬県域だけでなく関東山地に近接した地域での普遍的なものであることが窺える。

また、環状列石の重層性や環状構造を前段階の環状集落との共通性としてとらえがちであるが、その基本的構造は大きく異なっている。なぜなら、三原田遺跡を代表とする環状集落の居住帯は、時間的経過とともに外環から内環へとその占地範囲を縮小する方向性をもつのに対し、野村遺跡や久森遺跡などの大環状列石集落は、内環から外環へと放射・拡散的に構築されており、両者は正反対の方向性を有しているからである。大環状列石集落は、このような基本的原理や価値観の変革を伴って形成されたものと言えるだろう。

(4) 環状・弧状列石に見る階層的様相

野村遺跡や久森遺跡に代表される大規模環状列石の構築が、その周囲に検出される数棟の柄鏡形敷石住居の居住者だけにより行われたものでないことは、列石に使用される多数の石材や1個が有に数百kgを越すような大形礫の存在から見て明らかである。おそらく、周辺の複数集落に居住する同系集団の協働によって、中期末葉の一定期間内で継続的に構築されたものであり、同時に周辺集落を統合する機能・性格を有した拠点集落として存在したと考えられる。そうした意味では、周辺域の小環状・弧状列石集落や小規模集落に対する大環状列石集落の優越性を認定することもできよう。ただし、坪井・三原田・白川傘松・下鎌田などの遺跡に代表的な小環状・弧状列石は、その規模や構造的単純さから見て、一集落の集団内で構築・保持されたものと想定される。

また、坂本北裏遺跡例が先に想定したような複数の大小規模の環状・弧状列石により組成されるとすれば、大規模環状列石においても久森遺跡や野村遺跡などのタイプとは別な構造を有すると見なければならぬ。

このような環状・弧状列石に見る規模・形態・構成内容などの多様さは、塚原正典が既述しているように環状・弧状列石における「祭祀活動が社会組織のいろいろなレベルで行われた」ことを示すものであり、また「一集落のみの小規模な祭祀活動、近隣の2、3の集落での共同祭祀、さらに上の段階の多数の集落での共同祭祀」（塚原1987）と言うような、環状・弧状列石を媒介とする祭祀行為に階層的構造が存在した可能性を示唆するものであろう。換言するならば、そうした階層的構造は大環状列石集落を頂点に序列化されたものであったと想定される。

環状・弧状列石には、それを構成する石材配置により構築単位が存在することを前述したが、これは構築に関わる複数の小集団の存在を示す可能性も考慮される。また、白川傘松遺跡では約50mの間隔を置いて2つの弧状列石が存在し、それぞれに近接して加曾利E4式期の複数棟の柄鏡形敷石住居が2地点に散在する。これらが同時併存すると仮定すれば、同一集落内で2つのグループが弧状列石による祭祀を分有していたことになる。

こうした複雑な様相を呈する環状・弧状列石の祭祀構造が、塚原のように「リニージ構造」に照応させることで理解できるほど単純なものとは思えないが、そうした祭祀構造の背後に社会的集団の分節的・階層的構造が存在する可能性は高いだろう。

5 後期の環状・弧状列石や配石墓との脈絡

これまで検討してきたように、中期における環状・弧状列石は加曾利E3式IV期に出現して同E4式期には終焉を迎えるという、存続期間の極めて短いことが想定できる。また、その列石内や下部には、基本的に墓を伴わないことも明らかであり、後期の環状・弧状列石や配石墓を伴う集落が継続立地することも皆無である。こうしたことは、後期の後半段階に顕著となる配石墓と融合した列石には、直接連繫しないことを示唆するものである。

しかし、後期初頭段階のあり方に関しては、詳細な検討が行われている訳ではなく、中期末葉の環状・弧状列石との連繫が皆無なのか否か、あるいはそれがどのように変質を遂げてゆくのか否かを見定めておく必要があるだろう。

後期初頭の環状・弧状列石については、堀之内1式期では暮井遺跡、堀之内2式期では浅田・前中後²⁴⁾・行田梅木平などの遺跡例が知られている。図19のようにこの4遺跡例に共通しているのは、柄鏡形敷石住居に接続してその前面部左右に弧状の列石を配置するというあり方である。行田梅木平遺跡を除いて、他の3遺跡はいずれも集落の部分的調査のために、列石が環状なのかあるいは円弧状に配列されるのか判然としないが、柄鏡形敷石住居と列石とが融合した状況にあることが解る。また、行田梅木平遺跡や浅田遺跡の例で見ると、このような融合的關係は特定の柄鏡形敷石住居に限定されていることが窺える。

一方、こうした弧状列石下には、行田梅木平遺跡や前中後遺跡のように、その長軸を弧状列石の中心部方向に揃えた集団墓的な土坑墓や配石墓を伴うものもあり、中期末葉の環状・弧状列石とは明らかに異なっている。しかし、堀之内1式期の暮井遺跡では、列石下に墓坑を伴っていないことから、列石と墓との関係性は状況的に見れば堀之内2式期に顕在化するものと言えよう。換言するならば、堀之内1式期の弧状列石と同2式期の弧状列石

とは、その機能・性格に少なからず質的差異が存在すると思われる。

行田梅木平・前中後などの遺跡における弧状列石の構築状態を見ると、列石が単純に連続配置されているのではなく、土坑墓上面の方形組石遺構や配石墓を基点として、それを相互に連携するように配石する状況が看取される。先に見てきたように、野村遺跡や久森遺跡などの加曽利E 4 式期における大環状列石集落では、特定の柄鏡形敷石住居と弧状列石との融合的關係に加え、墓との関係性は持たないものの、列石の構築が幾つかの基点を単位にして行われるという状況が認められた。また、田篠中原遺跡や坂本北裏遺跡では、墓坑を伴わないが円礫や立石を圍繞する方形組石遺構が環状・弧状列石の外縁部に存在していた。このような中期末葉の様相は、後期初頭における弧状列石のあり方とも類似するものであり、双方の環状・弧状列石に何らかの脈絡が存在していた可能性を窺わせる。

しかし、弧状列石と柄鏡形敷石住居の融合關係は、堀之内1 式期の暮井遺跡だけでなく横壁中村遺跡²⁵⁾でも認められるものの、これまでのところ当該期を遡る事例は確認されていない。つまり、称名寺I・II 式期においては、このような両者の關係が認められないだけでなく、環状・弧状列石そのものが見あたらない状況にある。

こうした現況を踏まえると、加曽利E 4 式期と堀之内1・2 式期の環状・弧状列石の類似性を直接的な系統關係に置き換えることに少なからず躊躇を覚えるが、列石と融合した集団墓的な墓坑や配石墓の存在を除外すれば、両者の脈絡は極めて明瞭かつスムーズなものにも見える。例えば、柄鏡形敷石住居と列石との融合關係で見たときに、加曽利E 4 式期では萌芽の様相であったものが堀之内1 式期で顕在化し、さらに堀之内2 式期では何らかの構造的変革により墓坑や配石墓が付加されてゆく方向性が看取されるのである²⁶⁾。墓坑を伴わない中期末葉の方形組石遺構が、堀之内2 式期には墓坑上面の墓標的な遺構に置換されてゆくのも、同様の方向性の中で理解することもできよう。

それでは、なぜ堀之内2 式期において墓坑や配石墓が組み込まれてゆくのだろうか。浅田遺跡では、堀之内2 式期に比定される弧状列石や日時計状の円形組石遺構(図17-d)に、「小牧野式」構築法が採用されている²⁷⁾。この構築法は、既述したように山形県小林遺跡や青森県三内丸山遺跡などの中期末葉段階の環状列石や配石遺構に採用されていることから、東北地方北部域において他地域に先駆けて出現し、同域の青森県小牧野遺跡や秋田県伊勢堂岱遺跡の後期環状列石へと、連続的に受け継がれていったことが想定できる。浅田遺跡例は、群馬県内を始め中部・関東圏域では初例となるが、その受容が堀之内2 式期まで下ることは、東北地方北部域からの文化

的影響の顕在化が、当該期にあることを物語るものであろう。

また、浅田遺跡の日時計状組石遺構は、円形状を呈するとともにその下位に墓坑を随伴しないことから、中期末葉の田篠中原遺跡や坂本北裏遺跡など事例だけでなく、堀之内2 式期の前中後遺跡や行田梅木平遺跡例とも異なっている。「小牧野式」による造作を加味すれば、それらの方形組石遺構とはではなく、秋田県大湯環状列石を始めとした東北北部域の環状列石に多見される日時計状組石遺構との系統關係が想定し得るであろう。

このような堀之内2 式期における東北地方北部域の文化的影響は、既に大工原豊らが天神原遺跡の後期配石墓研究の中で指摘しているように(大工原・林1995)、他地域に先駆けた配石墓の動向にも認められており、ともに一連の文化的伝播現象として理解することができよう。

当該域の堀之内2 式期における弧状列石には、少なくとも行田梅木平遺跡や前中後遺跡のように各墓坑を連結して一体化するタイプと、浅田遺跡のように墓坑とは直接関連しないタイプの2 者が存在する。これに類似したあり方は、東北地方北部の環状列石でも認められており、富樫泰時は前者のあり方を「大湯万座型」、後者のあり方を「小牧野型」として分類し、その背景に死者に対する考え方や葬送儀礼の違いが存在するとしている(富樫1997)。行田梅木平遺跡や浅田遺跡の事例は、その形態が弧状列石と想定されることや柄鏡形敷石住居と融合するなど、東北地方の事例とは多くの相違点を有するが、この2 つのタイプの存在はそこに投影された觀念や価値觀が相互に異なっていたことを示すものであろう。この両タイプが、後期後半以降の当該域においてどのような変遷を辿るのか興味深い問題であるが、頁数との兼ね合いもあり、指摘するだけにしておく。

ところで、前中後遺跡や行田梅木平遺跡のように、土坑墓・配石墓と一体化した弧状列石を伴う柄鏡形敷石住居は、どのような機能・性格を有するのだろうか。石井寛は神奈川県小丸遺跡などの加曽利B 1 式期の集落を分析する中で、「多重複住居址」の前面を中心として弧状に墓域が設定されることを指摘し、この住居を集落の「長」が住まう「核家屋」と呼称するとともに、その住人を「集落全体の祭祀を司る立場にいた人物」としている(石井1994)。前中後遺跡や行田梅木平遺跡の事例は、多重複や頻繁な建て替えの痕跡に乏しいが、特定の柄鏡形敷石住居の前面に土坑墓や配石墓を弧状に配列する点などは、「核家屋」と同様の要件を備えていると考えられる。

石井が主張するように、こうした住居が集落内において特別の機能・性格を保持していた可能性は大きく、これを他住居との階層的關係に置き換えることもあながち間違いではあるまい。このような「核家屋」が、群馬県域において既に堀之内2 式期に認められる点は注目され

るところであるが、堀之内1式期を含めて、当該期の特定の集落にしか存在しない点にも注意を払う必要があるだろう。

つまり、こうした「核家屋」を中心とする集落は、中期末葉の野村遺跡や久森遺跡のように、各領域の拠点集落としての役割を担っていた可能性が高いと考えられる。ただし、中期末葉段階での大環状列石集落では、明確な階層的様相が認められないことから見ても、両者の拠点集落としての質的差異は大きなものであったと想定される。

中期末葉から後期前半を通観すれば、各領域において集団統合としての機能・性格を担う拠点集落の変遷は、①段階：環状集落→②段階：大環状列石集落→③段階：「核家屋」を中心とする集落、という図式を描くことができよう。①段階から②段階への変遷過程では、環状原理の方向性や祭祀・呪術体系の変革を、また②段階から③段階へは柄鏡形敷石住居と弧状列石の融合・一体化を経て、集団墓の形成と特定の柄鏡形敷石住居＝「核家屋」を中心とする階層的構造への変質をそれぞれ伴うものであった。

中期末葉の大環状列石集落を頂点とする祭祀形態にも階層的構造を窺うことができるが、後期前半段階の「核家屋」を中心とした集落への変移は、そうした階層化の深化過程としてとらえることができるのではないだろうか。称名寺式期での様相が欠落するものの、このような変遷過程のあり方は、少なくとも中期末葉の加曽利E3式IV期～同E4式期と後期の堀之内1・2式期との間に文化的な画期が存在したことを物語っている。また同時に、堀之内1式期と同2式期との間にも、配石墓・土坑墓の随伴に象徴される祭祀・葬送儀礼の変革という画期が存在したと見なければならぬだろう。またそのことは、環状・弧状列石を伴う各時期の拠点集落が、相互に同一地点での継続立地を避ける傾向の中にも窺うことができよう。

6 結 語

以上、中期末葉に出現する環状列石について、価値観や集団統合原理の転換を伴った新たな拠点集落の形成という観点から論じてみた。もちろん、こうした質的転換の内容は環状列石の形成だけに止まらず、「屋内敷石風習は屋内埋甕との結びつきにおいて、柄鏡形敷石住居へと変質し、幼児埋葬は屋内埋甕から屋外埋甕へと転化し、また、屋内廃屋葬はすたれ、集団墓の構築へと変化する」(山本1981)というような多くの文化事象の変化を随伴するものであった。

その変革を促す直接的契機は、遺跡数の増加に象徴される人口増加を維持するためのバイオマスが、気候の冷涼化により大きなダメージを受けたことにあるとされて

きたが、そうした環境悪化を受動的ではなく、むしろ積極的に乗り越えるための新しい集団統合システムとして、大環状列石集落を核とする階層的な祭祀体系を構築していったのではないだろうか。それは、前段階の環状集落を結集地とする集団統合システムとは、大きな質的差異を有するものであったと考えられる。

このような環状・弧状列石を媒介とする祭祀の階層性を、集落間やそこに居住する単位集団間の階層性にまで止揚できるものなのか否かの考定は、現在の筆者の力量を超えた問題である。しかし、後期前半の拠点集落に見られる特定の住居＝「核家屋」を中心とした集団統合原理の存在を考慮すると、そこには集落間だけに止まらず一集落内においても階層的な様相が窺えるのであり、このような社会的関係の萌芽を中期末葉段階の大環状列石集落に見出すことも不可能なことではあるまい。

いずれにしても、中期末葉の大環状列石集落における短期間での終焉や次期への継続性の乏しさ、さらには集団墓的な墓坑群が欠落するなどの状況は、後期前半の拠点集落とは直接的な系譜関係を持たないだけでなく、その質的差異の大きさを物語っている。

両者の脈絡がどのようにたどれるのか、またそれが後期後半以降の配石墓群を中心とするセトルメントシステムにどのように連繋するのか、今後において見極めなければならない課題である。

尚、本稿では環状・弧状列石について地域集団を統合する拠点集落という観点からの分析を主としたために、個別の環状・弧状列石がどのような機能・性格を有していたのか、またそれらの場ではどのような祭祀的儀礼が執り行われたのかについては全く触れることができなかった。このことに研究的関心がなかった訳ではなく、むしろそこまで踏み込むための知識的背景が無かったことに他ならない。

また、近年その装いを新たに主張されてきている、丘陵・山地部に偏在する環状列石の選地と山岳信仰や天体運行との関連については、実証的な検討が必要なこともあり、先と同様に扱うことができなかった。しかし、筆者としてはこのような考え方が、全くの荒唐無稽なものであるとは思っていない。それは、野村遺跡で見られたように、環状・弧状列石の築造に伴って傾斜面上方の地表を掘削して下方へ盛り土し、数段の平坦面を造成するような整地行為をしてまで、当該地に固執する背景がよく理解できないからである。民族誌で見る未開集落の造形や配置には、太陽の運行や宇宙観などが反映された事例が数多く認められるようであり(ダグラス・フレイザー1984)、縄文時代の中期社会にも類似した観念が存在したとしても何ら不思議はないだろう。

ただし、群馬県域は山地地形が卓越する地域でもあり、どの地点においても何らかの山体を望むことができる。

天体の運行や特定の山体との関連性をめぐる解釈を妥当なものとするためには、更なる検証作業を積み重ねる必要があるのではないだろうか。

いささか冗長に文を重ねてきてしまったが、本稿は群馬県域における中期末葉の環状・弧状列石を伴う集落の機能・性格について、分析を試みたに過ぎず、この結果を他地域に直接敷衍することはできない。各地域においては、また独自の個別的様相が存在すると思われる。隣接する周辺域の文化的諸様相とも比較検討する中で、地域的な縄文社会のあり方を分析していく必要があると思考している。

また、前稿では資料操作に粗さがあり、基本的な遺構時期などの認定で誤った部分もある。そうした点については、本稿にて訂正することに了解されんことを願うとともに、前稿の補遺とする次第である。

(2002年3月8日稿了)

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、石井克巳氏を始め千田茂雄氏、軽部達也氏、堀口幸則氏などの方々には、資料の実見に際して数々の便宜を取りはからっていただき、また下記の方々からは多大なるご指導とご教示をいただいた。文末ながら記して深甚なる感謝の意を表する次第である(五十音順 敬称は省略させていただいた)。
赤山容造、阿部昭典、佐藤雅一、佐藤正俊、関 俊明、大工原 豊、田村公夫、富田孝彦、能登 健、長谷川福次、藤巻幸男、古郡正志、松原孝志 諸田康成

註

- 1) 加曾利E式土器の細分については、諸説あって各研究者の一致を見ない状況にあるが、本稿で用いた編年案については従前より提示してきた内容に準拠している(能登・石坂1981、石坂・藤巻1985、藤巻幸男・桜岡正信1989、石坂茂・藤巻幸男・桜岡正信1988・1991)。また、加曾利E3式については、図6のように4段階に区分した。
- 2) 谷口康浩は、堅穴住居が配置される圏帯を「居住帯」と呼称しているが(谷口2001)、本稿でもこれに倣った。
- 3) 環状集落の「居住帯」変遷が、外側から内側へと推移する現象については、生活残滓を「居住帯」の外側に廃棄するために、住居の改・新築時には残滓を避ける必要から、常に内側へと造らざるを得ないとして、「環状原理」とは無関係とする見解もある。しかし、三原田遺跡の環状原理の崩壊した加曾利E3式IV段階～称名寺II式期における集落には、やや不整然ながらその前段階の「居住帯」の外側へと拡散する状況も窺えることから、やはり勝坂3式期～加曾利E3式III段階にかけての「居住帯」縮小の方向性には、「環状原理」の規制が働いている可能性が高い。
- 4) 十二原II遺跡では、環状列石が存在したとされている(菊池1986)。しかし、内容的には50点弱の河床礫が極めて散漫に分布するだけであり、これを環状列石と認定することは困難であることから除外しておきたい。
- 5) 東平井寺西遺跡については報告書を作成中であり、担当者の軽部達也氏よりその内容に関してのご教示を得た。
- 6) 旧稿において、中期末葉の環状列石の継続・消滅時期を堀之内式期にあるとしたが(石坂・大工原2001)、この点に関しては本稿をもって訂正しておきたい。
- 7) 註5)と同じ。
- 8) 報文中では、2号石組列と1号配石とは別個のものとして扱われて

いるが、相互の配置状況から見て本来は一連の弧状列石と判断される。

- 9) 図11に掲載した横壁中村遺跡例は、発掘途中の状況をパンフレット用(「遺跡は今」第3号)に図化したものであり、上方の山体から転落した自然礫との弁別がなされていないために不明瞭であるが、担当者の藤巻幸男氏のご教示によると、長さ40m前後の弧状列石が少なくとも二重に配置されるようである。
- 10) 小林遺跡の報文中には明示されていないが、担当者の佐藤正俊氏よりその環状列石に「小牧野式」と同様の構築方法が採用されていたことのご教示を得た。
- 11) 野村遺跡の環状列石は、南半部の配列状態が希薄となっている。調査担当者の千田茂雄氏のご教示によれば、この南半部には散在的ながら2石を1単位にした一定間隔の配列が、北半部の形状とシンメトリに存在するということであり、その基本的形態が隅丸方形であることは間違いないと思われる。野村遺跡は現在報告書作成中であり、その刊行後に再度詳細な検討を行いたい。
- 12) この埋設土器の機能・用途については、その内容物が検出されないこともあり、建築儀礼・幼児埋葬施設・胎盤収納施設など諸説見られるが、田篠中原遺跡では脂肪酸分析により胎盤収納説を採っている。脂肪酸分析については、難波紘二らによって厳しく批判されており(難波・岡安・角張2001)、今日的には少なからず問題のある「科学的分析法」であろう。
- 13) 田篠中原遺跡では、長辺197×短辺65×深さ18cmの長方形状を呈する8号土坑(図17-h)の上部に標石状の立石が存在し、配石墓として認定されている。その時期を明示するような遺物は見られないが、集落時期との関係から中期末葉に比定されるとともに、その規模や形態、埋設土の状況などから見て墓坑の可能性は高い。この配石墓については、「環状列石下から検出され、墓標は列石に連なっていた」(菊池1990)とされているが、掲載された実測図や写真からはそうした状況は認められない。弧状列石に比較的近接してはいるものの、むしろその周辺部に存在した墓坑と考えられる。同遺跡で8号土坑以外の配石墓には、1・3・5・7・11・12・14・15・18・19号土坑などの10基を想定できる。
- また長根安坪遺跡では、小規模な弧状列石の下部より墓坑が検出されたとしている(菊池1997)。これは、散在的な礫の分布を弧状配石と見たことによるが、そうした認定には無理がある。むしろ、1・3・5・6号などの各土坑の掘込み上位面に標石状に配置されていた用石が、後世などの攪乱により部分的に散乱するなどして、擬似的な列状を呈するようになったと見なす方が整合的である。1号列石から東側に外れた10・12号土坑の上面にも複数個の礫が認められ、この区域に標石的な配石を伴う墓坑の集中する状況が窺える。
- 14) 千田茂雄氏のご教示による。
- 15) 田篠中原遺跡では11号配石の一部として、また坂本北裏遺跡では2号石囲炉として扱われている。
- 16) 長久保大畑遺跡では、集石土坑に類似した集石遺構が16基検出されているが、報告者はこれらを墓坑と認定している(田村2000)。残存状況の良好な3・5号は、浅い土坑状の掘込みを伴い、その坑底部や壁面に礫の敷き詰めや積み上げを行った後に小礫を充填した状況が観察できる。これと類似したあり方は、坂本北裏遺跡や東平井寺西遺跡の集石土坑でも確認されており、ここでは石材に明瞭な被熱の痕跡が認められている(註5と同じく、軽部氏のご教示による)。長久保大畑遺跡例には明瞭な被熱の痕跡が認められないようであるが、それ以外のあり方は墓ではなく調理施設的な集石土坑として認定し得るものである。
- 17) 田篠中原遺跡の配石遺構のうち、6・7・9・12・20・22号などは扁平礫の敷設状況から見て、柄鏡形敷石住居の残骸である可能性が高い。また長久保大畑遺跡の場合、遺構構築面上層には東側の陣馬泥流丘の崩落により供給された多数の亜角礫が堆積するために、遺構の用材との区別を難しくしている。土器を伴出している1・2・7号などの配石遺構は、田篠中原遺跡と同様に柄鏡形敷石住居の可能性が高い。
- 18) 藤巻幸男氏のご教示による。
- 19) 野村遺跡では、環状列石の外縁部を圍繞するような居住配置が存在するが、環状列石の外縁部南側に展開する住居群の伴出土器を実見したところ、時間的に環状列石よりも1～2段階程度古いものであり、環状列石構築時の居住帯が環状を呈することはないだろう。

- 20) 図18の凡例中で「磨石」としたものは、磨石を始め凹み石や敲石などの「磨る・敲く」機能を有する小円礫状の石器を包括したものである。また、「棒石」は長さ15cm、幅4cm、厚さ2cmほどの扁平な結晶片岩の棒状河床礫を素材として、その周縁部に敲打と研磨を施して整形する石器であり、その機能・用途については明確になっていない。しかし、結晶片岩は各遺跡ともに10～20kmも離れた鍋川水系の河床に存在する石材であり、石棒などにも多用されることを考慮すると、呪術的石器の一種として存在した可能性もあるだろう。
- 21) 環状・弧状列石を構成する石材には、石棒や多孔石などの呪術的石器の他に多数の打製石斧・石皿片や凹み石・磨石類などの実用的石器が含まれている。これらの実用的石器はその機能を失った廃材として転用されたのではなく、環状・弧状列石がそれら石器の「モノ送りの場」としての性格も有していたのではないだろうか。
- 22) 坂本北裏遺跡の場合、不確定な要素が多いが、ここでは「環状配石遺構4」を隅丸方形的な大規模環状列石と仮定しておきたい。
- 23) 列石規模とその構築に投下された労働量の大きさは、必ずしも正比例の関係ではない。なぜなら、その石材供給地との距離の条件が個々の遺跡で異なっているからである。例えば、大弧状列石を持つ横壁中村・空沢・田篠中原などの遺跡では、近隣の山体斜面からの転石や河岸段丘旧地表面からの河床礫などの供給を得易く、外見的には大規模であっても、そう大きな労働量が必要ないことも考えられる。しかし、野村遺跡や久森遺跡などの大環状列石の場合にはかなり状況が異なり、野村遺跡は標高差40m、直線距離で約200m離れた秋間川から、久森遺跡は崖下にある標高差40～50mの沢渡川からそれぞれ石材を運び上げている。久森遺跡例は野村遺跡例には及ばないものの、ともに前者の横壁中村遺跡例などとの差異は非常に大きなものがある。
- 24) 前中後遺跡では、土坑墓や配石墓を随伴する弧状列石とJ-1号住居とが連接している。概報のみでその詳細は不明だが、堀口幸則氏のご厚意により写真資料を実現した範囲では、このJ-1号住居は敷石のやや希薄な柄鏡形敷石住居の可能性があり、本稿では弧状列石と融合的な事例として扱った。詳細は、本報告の刊行後に再検討したい。
- 25) 横壁中村遺跡では、2001年に中期末葉の大弧状列石集落とは地点を違えて立地する後期前半～後半にかけての集落を調査している。報告書作成中であり、藤巻幸男氏よりご教示を得た。
- 26) 石井寛は、野村遺跡や久森遺跡のように、柄鏡形敷石住居の配置が時期が新しくなるに従い内縁→外縁へと移動してゆくあり方について、遺跡地の「要」である斜面上方へと立地を変える後期の「核家屋」との関連において理解しようとしている(石井2001)。これについて筆者は、先述したように前段階の環状集落の変遷過程に見る外環→内環という基本原理と相反する対極的原理として採用されたものと理解したが、いずれにしても両遺跡に見る加曽利E4式期の柄鏡形敷石住居が弧状列石と融合化する傾向を見せている点は、後期堀之内1式期の祖型的な様相として評価できるだろう。
- 27) 浅田遺跡は出土資料の整理中であり、石井克巳氏のご厚意により土器や写真資料を実現させていただいた。

引用・参考文献

あ

- 相沢貞順・三宅敦教 1988「新治村役場遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器・縄文)』
- 赤山容造・他 1980「三原田遺跡(住居篇)」第一巻 群馬県企業局
- 赤山容造 1988「三原田遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器・縄文)』
- 赤山容造・他 1990「三原田遺跡」第二巻 群馬県企業局
- 秋元信夫 1997「大湯環状列石」『日本考古学協会1997年度大会 シンポジウムI 縄文時代の集落と環状列石 研究発表要旨』日本考古学協会
- 秋元信夫 1999「遺構研究 環状列石」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 阿部昭典 1998「縄文時代の環状列石—新潟県中魚沼郡津南町道尻手遺跡・堂平遺跡を中心として—」『新潟考古学談話会会報』第18号 新潟考古学談話会
- 阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動—複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及—」『物質文化』第69号

- 阿部昭典 2001「縄文時代中期末葉の集落構造の変容」『新潟考古』第12号
- 五十嵐一治 1999「伊勢堂岱遺跡—県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II—」秋田県教育委員会
- 池田政志・他 2000「三ツ子沢中遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石井克巳 1988「押出遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器・縄文)』
- 石井克巳 2000「浅田遺跡」子持村教育委員会
- 石井 寛 1977「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2
- 石井 寛 1994「縄文時代後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1995「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 石井 寛 2001「関東地方における集落変遷の画期と研究の現状」『第1回研究集会 発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 石坂 茂・原 雅信 1984「縄文時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会
- 石坂 茂・藤巻幸男 1985「1 加曽利E式土器について」『荒砥前原遺跡・赤石城址』群馬県埋蔵文化財事業団
- 石坂 茂・他 1985「荒砥二之堰遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1985「群馬県三原田遺跡(縄文時代の大集落址)」『探訪 縄文の遺跡 東日本編』有斐閣選書R
- 石坂 茂 1986「荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 1988「加曽利E式土器に関する一考察—いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜—」『10周年記念論文集 群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財事業団
- 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 1991「縄文時代後期初頭における加曽利E式土器の一樣相—群馬県域出土の資料を中心とした編年的分析—」『群馬県史研究』第34号
- 石坂 茂・大工原 豊 2001「群馬県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会 基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 伊藤晋祐・増田 修・他 1977「千網谷戸遺跡発掘調査概報」桐生市教育委員会
- 伊藤晋祐・増田 修・他 1978「千網谷戸遺跡発掘調査報告」桐生市教育委員会
- 伊藤晋祐・増田 修・他 1988「千網谷戸遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器・縄文)』
- 井野誠一・他 1990「芳賀東部団地遺跡」III 前橋市教育委員会
- 井上慎也・他 1999「砂押遺跡」『中野谷地区遺跡群発掘調査概報5』安中市教育委員会
- 井上雅孝 1997「湯舟沢II遺跡の調査」『日本考古学協会1997年度大会 シンポジウムI 縄文時代の集落と環状列石 研究発表要旨』日本考古学協会
- 上野佳也 1984「配石遺構についての一考察」『東京大学文学部 考古学研究室研究紀要』第3号
- 上野佳也 1986「配石遺構の諸問題」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
- 内田憲治・他 1984「新里村の遺跡」新里村教育委員会
- 内田憲治 1982「上鶴ヶ谷遺跡」新里村教育委員会
- 江坂輝彌 1985「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No254
- 遠藤正夫 1997「青森県小牧野遺跡—その掘削・整地・配石作業—」『考古学ジャーナル』No412
- 遠藤正夫 1997「小牧野遺跡環状列石に見る構築理念」『日本考古学協会1997年度大会 シンポジウムI 縄文時代の集落と環状列石 研究発表要旨』日本考古学協会
- 大江正行・他 1990「仁田遺跡 暮井遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大賀 健・他 1997「下鎌田遺跡」下仁田町遺跡調査会
- 大塚昌彦・他 1979「空沢遺跡」渋川市教育委員会
- 大塚昌彦・他 1980「空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報」渋川市教育委員会

- 大塚昌彦・他 1982『空沢遺跡(第3次)』渋川市教育委員会
 大塚昌彦 1985『空沢遺跡第5次 I・J・K・L地点発掘調査概報』渋川市教育委員会
 大塚昌彦 1993「第一章 原始・古代」『渋川市誌』通史編・上 原始～近世 渋川市市誌編さん委員会
 大林太良 1971「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2-2
 近江屋成陽 1991『横俵遺跡群』II 前橋市埋蔵文化財調査団
 鬼形芳夫 1985「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 鬼形芳夫 1988「遺跡の動態と集団関係―榛名山東南麓における縄文時代遺跡の現状と課題」
 鬼形芳夫・内木真琴 1988「鐙川右岸下流域段丘上における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 小野和之・他 1999「横壁中村遺跡1・横壁中村遺跡2」『年報』18 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 か
 可見通宏 1993「縄文時代のセトルメントパターン」『季刊考古学』44号 雄山閣
 葛西 励 1986「青森県における縄文時代の組石遺構」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
 金子正人 1990『芳賀北曲輪遺跡』前橋市埋蔵文化財調査団
 金子伸也 2001「天ヶ堤遺跡」『平成13年度調査遺跡発表会』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 金子正人・他 1999『坂本北裏遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会
 加納 実 2001「柄鏡形住居跡分析の一視点―縄文時代後期前半集落の解明にむけて―」『土曜考古』第25号 土曜考古学研究会
 軽部達也・茂木 努 1995『藤岡北山B遺跡』藤岡市教育委員会
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『遺跡は今』第3号
 菊池 実 1986『三後沢遺跡・十二原II遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 菊池 実 1988a「縄文時代の環状列石―群馬県内における調査事例から―」『東国史論』第3号 群馬考古学研究会
 菊池 実 1988b「群馬県における縄文時代の配石遺構覚書」『群馬の考古学―創立十周年記念論集―』群馬県埋蔵文化財事業団
 菊池 実 1990「縄文時代の配石遺構調査雑感」『東国史論』第5号 群馬考古学研究会
 菊池 実・他 1990『田篠中原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 黒尾和久 1988「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』No454
 小杉 康 1991「縄文時代に階級社会は存在したのか」『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会
 小杉 康 1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立―「葬墓祭祀」の構造と機能―」『駿台史学』第93号 駿台史学会
 児玉大成・他 1996～2001『小牧野遺跡発掘調査報告書』I～VI 青森市教育委員会
 小林 修 2001「史跡滝沢石器時代遺跡の学史的考察」『赤城村歴史資料館紀要』第3集 赤城村教育委員会
 小林 克 1997「伊勢堂岱遺跡について」『日本考古学協会1997年度大会シンポジウムI 縄文時代の集落と環状列石 研究発表要旨』日本考古学協会
 小林謙一 1988「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期におけるセトルメント・システムの分析―地域文化成立過程の考古学的研究(2)」『神奈川考古』24
 小林達雄 1973「多摩ニュータウンの先住者―主として縄文時代のセトルメント・システムについて―」『月刊文化財』112号
 小林達雄 1986「2 原始集落」『岩波講座 日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
 小林達雄 1988「スペースデザインと円」『古代史復元3 縄文人の道具箱』講談社
 小林達雄 1993「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』天山舎
 小林達雄 1994「縄文土器と集団」『季刊考古学』48 雄山閣
 小林達雄 1995「縄文時代の「自然の社会化」」『縄文時代における自然の社会化(季刊考古学・別冊6)』雄山閣
 小林達雄 1999「シンポジウム祭祀儀礼空間の形成と展開」『祭祀空間・儀礼空間』雄山閣
 小林良光・他 1991『空沢遺跡第10次―V・W・X・Y地点発掘調査概報』渋川市教育委員会
 さ
 桜岡正信・他 1986『上野国分僧寺・尼寺中間地域』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 佐々木雅裕 2001「三内丸山遺跡最新情報―発掘調査から―」『三内丸山遺跡・縄文シンポジウム2001全国キャラバン 縄文遺跡大集合 北からのメッセージ』青森県教育委員会
 佐々木藤雄 1981「縄文時代の通婚圏」『信濃』第33巻第9号
 佐々木藤雄 1982「集落を通して縄文時代の社会性を探る」『考古学ジャーナル』No203
 佐々木藤雄 1983「縄文時代の親族構造」『異貌』10
 佐々木藤雄 1993「和島集落論と考古学の新しい流れ―漂流する縄文時代集落論」『異貌』13
 佐々木藤雄 1997「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族(上)」『先史考古学論集』6
 佐々木藤雄 1998「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族(下)」『先史考古学論集』7
 佐藤明人・他 1992『三原田遺跡』第三巻 群馬県企業局
 佐藤鎮雄・佐藤正俊・他 1976『小林遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
 佐野 隆・小宮山隆 1994「縄文時代配石研究の一視点」『山梨考古学論集』III 山梨県考古学協会
 下条 正・女屋和志雄・他 1987『深沢遺跡 前田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 下条 正・他 1989『大平台遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 下条 正・女屋和志雄・谷藤保彦・中東耕志 1989「縄紋時代後期における配石墓の構造―深沢遺跡の形成過程を中心として―」『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 新藤 彰 1988「下新井遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器・縄文)』
 鈴木正博 1980「婚姻動態から見た大森貝塚」『古代』67
 鈴木保彦 1980「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』9
 鈴木保彦 1986「続・配石墓の研究」『神奈川考古』22
 鈴木保彦 1985「縄文集落の衰退と配石遺構の出現」『日本史の黎明―八幡一郎先生頌寿記念考古学論集―』六興出版
 鈴木保彦 1998「定形的集落の成立と墓域の確立」『長野県考古学会誌』第57号 長野県考古学会
 関根慎二・他 1997『白川傘松遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 千田茂雄・小野和之 2001「野村遺跡(中期)」『安中市史 第四巻 原始古代中世資料編』
 千田幸生・他 1997『新堀東源ヶ原遺跡』松井田町遺跡調査会
 藺田芳夫 1972『群馬県桐生市千綱谷戸C-ES地点の調査(須永式土器予報)』桐生市教育委員会
 藺田芳雄・他 1977『熊野・藤生沢遺跡発掘調査報告』新里村教育委員会
 た
 大工原 豊・関根慎二・林 克彦・他 1994『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
 大工原 豊・林 克彦 1995「配石墓と環状列石―群馬県天神原遺跡の事例を中心として―」『信濃』第47巻第4号
 大工原 豊 1999「関東甲信地方における祭祀遺跡・祭祀遺構―「環」状構造のもつ意味―」『シンポジウム 21世紀と縄文文化』(燐土舞台文化事業部
 田口一郎・鳥羽政之 1988「中善地・宮地遺跡」『群馬県史 資料編1』
 ダグラス・フレイザー、渡辺洋子訳 1984『未開社会の集落』井上書院
 谷口康浩 1986a「縄文時代「集石遺構」に関する試論―関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として―」『東京考古』4 東京考古談話会
 谷口康浩 1986b「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」

『考古学雑誌』48号 雄山閣
 谷口康浩 1993「セトルメント・システム論」『季刊考古学』48号
 谷口康浩 1998「環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—」『古代文化』第50巻第4号
 谷口康浩 1998「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
 田村公夫 1998「群馬県における縄文中期の環状列石遺構について—久森環状列石遺跡を中心に—」『群馬考古学手帳』8 群馬土器観会
 田村公夫・他 2000「長久保大畑遺跡 新田入口遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 塚原正典 1987『考古学ライブラリー49 配石遺構』ニュー・サイエンス社
 寺内敏郎・他 1988「C7 神明北遺跡 C8 谷地遺跡」藤岡市教育委員会
 寺内敏郎 1988「谷地遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1 (旧石器・縄文)』
 土井義夫 1985「縄文時代集落論の原則的問題—集落遺跡の二つのあり方をめぐって—」『東京考古』3
 土井義夫 1988「〔セトルメント・パターン〕の再検討」『史館』第20号
 土井義夫 1991「〔研究メモ〕定住・移動と領域論」『貝塚』45
 富樫泰時 1995「秋田県大湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化 (季刊考古学・別冊6)』雄山閣
 富樫泰時 1997「配石の遺構」『季刊考古学』第59号 雄山閣
 富田孝彦 2000『坪井遺跡II』群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
 仲田茂司 1986「配石遺構の諸問題」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
 中村良幸 1986「配石遺構の諸問題」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
 難波紘二・岡安光彦・角張淳一 2001「考古学的脂肪酸分析の問題点」『日本考古学協会第67回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
 西田正規 1989『縄文の生態史観』東京大学出版会
 丹羽佑一 1993「縄文集落の住居配置はなぜ円いのか」『論苑考古学』天山舎
 能登 健・石坂 茂 1981「群馬県縄文中期土器10段階区分図(説明)」『日本考古学協会昭和56年度大会 シンポジウムI 北関東を中心とする縄文中期の諸問題 資料』日本考古学協会
 能登 健・石坂 茂 1984「群馬県における縄文時代集落の研究」『日本考古学協会昭和59年度大会 シンポジウム縄文時代集落の変遷』日本考古学協会
 能登 健 1986「1 遺跡分布調査による縄文集落変遷の分析—特に前期・中期の地形別分布偏差について—」『粕川村の遺跡』粕川村教育委員会
 能登 健 1989「群馬県赤城山麓の遺跡群調査—縄文時代前期から中期の遺跡立地の変遷について—」『研究論集(第1回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウムの記録)』IV 東京都埋蔵文化財センター
 能登 健 1992「〔3〕日本村落史と日本史研究」『日本村落史講座1 総論』雄山閣
 長谷川福次 1993「前中後II遺跡」『村内遺跡I』北橘村教育委員会
 長谷川福次 1999「箱田遺跡群(上原・三角遺跡) 真壁諏訪遺跡」北橘村教育委員会
 長谷川福次・山口逸弘・他 2001「道訓前遺跡」北橘村教育委員会
 羽生淳子 1990「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53
 羽生淳子 1993「狩猟・採集民の生業・集落と民族誌—生態学的アプローチに基づいた民族誌モデルを中心として—」『考古学研究』第41巻第1号 考古学研究会
 羽生淳子 2000「縄文人の定住度(上)・(下)」『古代文化』第52巻第2号、同3号 古代学協會
 林 謙作 1977「縄文期の葬制 第II部 遺体の配列、特に頭位方向」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古學會
 林 謙作 1991「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学会

林 謙作 1993「大湯環状列石の配石墓(2)」『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学会
 平林 彰・他 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告11・北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
 福山俊彰・他 1997『五料平遺跡 五料野ヶ久保遺跡 五料稲荷谷戸遺跡』松井田町遺跡調査会
 藤巻幸男・能登 健 1988「布施遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1 (旧石器・縄文)』
 藤巻幸男・桜岡正信 1989「群馬県における加曽利E4式土器について」『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』縄文セミナーの会
 藤巻幸男 2000「横壁中村遺跡」『年報』19 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 古郡正志・他 2000「第1章 第3節 縄文時代の藤岡 列石状遺構」『藤岡市史 通史編 原始・古代・中世』
 古屋敷則雄 1996「環状土壌群・列石の方位と配置の規則性について」『動物考古』第6号 動物考古学研究会
 細野高伯・他 1992「市之関前田遺跡III」群馬県宮城村教育委員会
 細野高伯・他 1996『鼻毛石中山遺跡』群馬県宮城村教育委員会
 堀口 修・他 1997『赤城村考古資料図録I 国指定史跡 瀧澤石器時代遺跡』群馬県勢多郡赤城村教育委員会
 前原 豊・他 1989『熊野谷遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 増田 修・萩原清史 1991「千網谷戸遺跡'91発掘調査概報」桐生市教育委員会
 松村一昭 1979「曲沢遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会
 松村和男・他 1986『下海老遺跡』群馬県教育委員会
 松村和男・他 1999「沼南遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 間宮政光 1997「行田梅木平遺跡」松井田町遺跡調査会
 丸山公夫・他 1985「久森環状列石遺跡」『上沢渡遺跡群』群馬県吾妻郡中之条町教育委員会
 宮野淳一 1988「中央広場からみた縄文集落の構成」『網干善教先生華甲記念考古學論集』
 茂木 努・志村 哲 1988「山間遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1 (旧石器・縄文)』
 矢吹俊男 1986「北海道の配石遺構」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
 山田昌久 1990「『縄文文化』の構図(下)」『古代文化』第42巻第12号 古代学協会
 山梨県考古学協会 1990「シンポジウム 縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—山梨県考古学協会秋期大会資料集」
 山本暉久 1977「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋壙について」『信濃』第29巻第11・12号
 山本暉久 1979「石棒祭祀の変遷」『古代文化』第31巻第11・12号
 山本暉久 1981「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開—関東・中部地方の配石遺構の分析を通じて—」『信濃』第33巻第4号
 山本暉久 1986「縄文時代後期前葉の集落」『神奈川考古同人会10周年記念論集 (神奈川考古第22号)』
 山本暉久 1991「環状集落址と墓域」『古代探叢』III 早稲田大学
 山本暉久 1992「神奈川県下における集落変遷の分析」『かながわの考古学』第2集 神奈川県立埋蔵文化財センター
 山本暉久 1999「遺構研究 配石遺構」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
 吉岡恭平 1986「配石遺構の諸問題」『北奥古代文化』第17号 北奥古代文化研究会
 若月省悟 1983「7 清泉寺裏遺跡」『笠懸村誌 別巻 原始古代篇』笠懸町教育委員会
 綿貫邦男・他 1997「長野原一本松遺跡」『年報』16 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 綿貫邦男・他 1997「横壁中村遺跡」『年報』16 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 渡辺 仁 1990『縄文式階層化社会』六興出版

SUMMARY

Disappearance of the Circular Settlement and arrival of the Stone Circle at the end of the Middle Jomon Period

— One study from the viewpoint of formation of the Base Camp in each period —

SHIGERU Ishizaka

In this paper I tried to analyze about the stone circle of the end of the Middle Jomon Period in the present area of Gumma Prefecture (Gumma area). The results of this study are as follows summarized:

At the latter half of the Middle Jomon Period, the circular settlements consisting of an open plaza, which was ringed by residences, newly appeared in the east part of Japan. These residences had the function to integrate each territory as base camp, but they disappeared at once at the end of the Middle Jomon Period. At the very same period, the structure of dwelling cluster, which was accompanied with stone circle, began to appear in the Gumma area. On this turning point, supported by a lot of social change (for example, the appearance of the handmirror-formed flagstone-floored residence: Ekagami-gata Shiki-ishi Jukyo: , the development of the funeral rite with the Infant-Burial-jars: Ume-Gane: , the development of the festival with the stone rod, the diminution of the number of sites, the transition of residence system into the smaller structure of the dwelling cluster), the structure of the rituals and residence system were changed.

In the Gumma area, the stone circle of the end of the Middle Jomon Period had a few different types, especially in the viewpoint of scale, form, and some components of the structure. This variation can be classified into two types: One type had a large size of 30 meters in diameter, and the rectangle form with rounded corner. The other type had a small size of 15 meters or less in diameter, and had the form of circle or arc. In addition, there was a clear difference between these two types: The large scaled type consisted of huge stones with large number, which were carried from far away over the years by dozens of people within a territorial group. On the contrary, the small scaled type is supposed to have built by a few people within a domestic dwelling cluster only in a few days. That is to say, from these facts we can guess the generation of the classified ritual style, in which the rituals of the large scale type meant to be superior to the small scale type's.

The structure of dwelling cluster with the larger stone circle differed from the circular settlement, which consisted of an open plaza ringed by residences, in the viewpoint of the principle of the integration of territorial group and the principle of the settlement system, but it can be said, that also the dwelling cluster with the large scaled stone circle, which newly appeared in the end of Middle Jomon period, played the role of the base camp, which has the function of the integration of the territorial group.

In the Gumma area, all the dwelling cluster with the large scaled stone circles did not have any burial pits under its stone-alignments as a cemetery, and disappeared during the end stage of the Middle Jomon period. Taking this fact into consideration, the style of such a stone circle had no direct relations to the typical stone circle with a burial of the Late Jomon period, which was outlined or enclosed or covered by stone alignments. There was a clear difference in the structure of the rituals between the end of Middle and the Late Jomon period, but stratified structure of the rituals between the large scaled and the small scaled stone circle in the end of the Middle Jomon period indicates the gradual shift into the stratified society of the Late Jomon period, in which the domestic chief executed the rituals.

Key Words

Middle and Late Jomon period, base camp, circular settlement, stone circle, domestic chief, structure of the rituals, stratified society, local features, Gumma Prefecture